金関丈夫

琉球民俗誌

発掘調査をもとに南島の人類学的位相を浮彫にして戦後沖縄研究の指針となった「八重山群島の古代文化」等一連の論考をはじめ，調査，紀行，交遊の貴重な記録を収め，考古学・人類学・民俗学の各分野はもとより，言語，芸能，歌謡にまで及ぶ南島文化への多角的・綜合的研究の航跡を示す．

法政大学出版局刊／1038-50070-7710 ● 定価1600円

琉球民俗誌

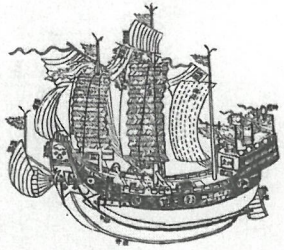
金関丈夫

沖縄学の原拠

解説＝中村哲

法政大学出版局

定価1600円 ● 1038-50070-7710



金関丈夫 既刊

日本民族の起源 二〇〇〇円

南方文化誌 一六〇〇円

文芸博物誌 一八〇〇円

上勢頭亨 竹富島誌 四六判・3800円 〈民話・民俗篇〉

中本正智 琉球方言音韻の研究 A5判・7600円

渡口真清 近世の琉球 四六判・2800円

外間守善 沖縄の言語史 四六判・1600円

甲第14号証

琉球の旅

はしがき

足立文太郎博士はつとに琉球人の体質人類学的研究の必要を私に説き、ともにこれに従事することを慫慂された。私は感激かつ歓喜して、この事業を必ずやりとげましょうと誓った。幸いにして昭和三年、帝国学士院よりこの研究に要する費用の一部を補助されたので、足立博士はまず私を琉球に派遣して、琉球人骨を蒐集せよと命ぜられた。

元来人骨の蒐集には、はなはだ困難な事情の伴うを常とする。そして琉球には大和墓とか平家墓とか称するものがあり、これに無数の人骨が転がっているということは、笹森儀助氏の『南島探検』以来聞いているし、おそらくこれは琉球人の忘れられた祖先の遺骨であろうというようなことは、しばしば伝えられたところである。その上私は先年東京で、伊波普猷氏、松村瞭博士などからも、親しく同様の実見談を聞いたので、琉球人骨は集るものと見込みをつけた。現に東京帝国大学人類学教室には、鳥居竜蔵博士が中城（なかぐすく）城下で採集した頭骨が十数個も所蔵されている。

さて琉球の航路は春夏がよく、秋冬は悪い。かつ私などは夏期の旅行が一身上最も好都合である。おそらく同様の事情で旅行者の多くは夏期を選ぶ。しかし私のような目的をもって琉球を訪問するものは、お

そらく先にその例がないであろう。琉球の毒蛇は今や都会よりその影を消した。この点では単なる訪問者は夏期の旅行に何らの危険を抱く必要がない。しかし山野の墓穴は毒蛇の好んで棲むところ。そして私の唯一の目的場所である。この意味において夏期の旅行は、私にとってはなはだ危険であると思った。私が冬期を選んだ理由はこれであった。ただしこの臆病なる事情が、私に常夏の国の冬知らぬ味わいをなめさせることになったのは、はなはだ幸福であった。

骨の有る無し、毒蛇のおるおらぬの他に今一つの心配があった。それは折角見つけた骨を首尾よく持って帰れるか否かの問題である。聞くところによれば、琉球人は厚葬の風あるのみならず、人骨に関してはさまざまの迷信があるとのことだから、この点ますます心配となった。これには官民諸方面の有力者に、できるだけ渡りをつけておく必要がある。そこで出立に際しては、でき得る限り多くの紹介状を用意した。そして事実これがはなはだ有効であったことは、後述の通りである。

最初私のもくろみでは、できるならば沖縄本島のみならず、離島、先島にも渡って、広く琉球人骨を蒐めたく思った。しかしこれは冬期の日数を限った旅行では、はなはだ困難な事が後に判った。またもし人骨蒐集の成績の悪いときには、せめても生体観測をしてこようと思った。そこで旅嚢中にはこれに必要な諸種の観測機械と、夥しい写真乾板を用意したのであるが、これは人骨蒐集の方が意外に繁忙であったために、ほとんど用いる機会なくして終った。

琉球航路は現今二つあり、神戸より海上に三晩、または鹿児島より同じく二夜にして那覇港に着く。私は必ずしも長い航路を厭うつもりではなかったが、他の目的のために鹿児島経由の道を選んだ。その目的の一つは、福岡高等学校所蔵の琉球石器時代遺物を一覧することである。これは琉球における私の日程に、あるいは貝塚発掘のことがあるかも知れぬと想像したためである。すなわちその場合に対する予備知識を

豊富にしようとの考えからである。今一つの目的は、琉球に最も近い、九州南端の石器時代遺物の見学である。これは幸いに鹿児島市の山崎五十麿氏の蒐集によってその大要が知られる。のみならず南九州は私にとって全く未見の地である。ここに人種学的事実の見聞をひろめる機会を得ようと思ったからである。

私はこのようなもくろみをもって、昭和三年十二月もおし詰った二十九日、京都駅を発する夜行列車に身を投じて西下した。

以来約一ヶ月間の旅行記を、当時の不完全な日誌と、今なお胸中に新たな記憶とによって、次に記してゆきたいと思う。ただし旅行当時より半歳以上を経た今日、その記憶のあるものは、はなはだしく薄れ行ったことを蔽うべくもない。そしてそれが今となって、遽だしくこの旅行記の筆を採らせた理由でもある。

以下便宜上日記体に記し、小節を区切って簡単な見出しをつけることにしよう。

1　北九州の顔

十二月三十日。関門海峡を渡ると急に旅の気持になる。北九州の旅は私にとってこれが始めてではない。しかし観察旅行としては始めてである。私は門司より福岡に至る車窓のつれづれに、北九州人の顔を観察しようと思った。この付近には他国よりの移住民が多い。これは顔貌を見るだけでもある程度までわかる。ことに四国人などが多くはないかと思う。しかしこの地方でなければ見られぬ——少なくともこの地方に比較的多く見受けられる——顔がないでもない。まず女の顔が眼についたからこの方から述べる。

顔高は中等度である。顴骨はやや出ている。下顎は比較的広く、額は狭くて円い。鼻は狭小で形ほどよく、眼もまた切長で美しい。口はやや大きいが醜くはない。唇は薄くて反り、歯も薄くて広い。下顎の張っているのは、胸鎖乳様筋の太いために目立たない。つまり頸はやや太く、頤舌骨線は後下方に傾斜している。年若い女性では頬の豊かな場合、顴骨の突出もさまで目立たず、顔全体は一つの厚味を有して一種の美観をなす。そしてその感じは繊弱でなくて、力強い感じが出ている。ことに横顔が端麗である。やや年長になって頬部の脂肪が減退すると、顴骨と顎上の突っ張ったのが目立ってくる。北九州の女性は美人としての年齢が短くはなかろうか。博多に本店のある京都の新三浦あたりでも、よくこれらの二型に出会う。彼女等は髪長く、頭は高くて狭い。

男の方も頭が高くて狭い。顔も狭く細作りだが額骨はやや出ている。額は低くて狭い。鼻は狭長である。口吻やや突出し、唇が尖っている。眼は細い。下顎はさほど張っていない。

これを要するに、北九州の顔は二種以上の型の混合型であるらしい。そしてその原型の一つはおそらく現今の山陰地方人と共通の系統に属し、他はおそらく南九州あるいは四国人等と、共通の系統に算えられるものではなかろうか。現にこの日、博多の街を歩いて、山陰地方人に最も多い型の顔貌にしばしば接した。頭高く、顔長く、鼻の狭いのは第一系より受け、顴骨が出で下顎の張ったのは、おそらくこの第二系より得たものであろう。ただし以上の観察はもとより科学的に正確なる方法によらず、私の不熟練な目測によるのであるから、全く素人考えに等しい。

こんな観察に時を忘れていると、汽車は正午前、博多駅に着いた。

2　福岡高等学校所蔵の琉球石器

駅前で昼食をすませた後、福岡高等学校教授玉泉大梁氏のお宅を訪ねた。折から九州大学高安教授御夫

妻の来訪があり、いずれも初対面の方であったが、しばらくの間快く談笑した。高安氏は海外にあって数年間、温泉治療学を研究され、ちょうど帰朝された時であった。温泉治療学研究所の設立は、別府を有する九州大学としては、まことに適当な思い付きだと思う。ただ近時の新聞紙上で、別府市における同研究所設立の件が、行き悩んでいると報ぜられているのは気の毒である。

しばらくして高安教授は辞去されたので、玉泉氏は私を福岡高等学校に案内された。同校の地歴参考室は、短年月の蒐集であるにもかかわらず、遺物の量においても、その施設においても、はなはだ見るべきものがある。これは玉泉教授の努力によるものである。

陳列品は第一門石器。第二門弥生式土器および埴輪、第三門祝部土器、第四門瓦、第五門瓷器、第六門貨幣、第七門鏡、第八門金環および玉類、第九門武具および馬具、第十門アイヌ土器の一〇部と門外雑の部として、歴史時代遺物や多少の土俗品を含んでいる。その総数三〇〇〇点、その中で見るべきものは、北九州地方発見のいわゆる金石併用時代土器等であろう。私はこれらの陳列棚を一巡した後、とくに乞うて琉球石器の縦覧を許された。同蒐集はもと沖縄在住の検事、大井七郎氏の未亡人より同校に寄贈されたものであって、その数三八点、うち石斧三〇点、凹石二点、円石六点より成る。

石斧は中頭郡国吉坂大山（うやま）村採集のものが最も多くて一九点に達し、同郡読谷山（よんたんさん）村のもの三点、荻堂二点、出所不明のもの三点、以上二七点は、石質数種あるがみな磨製、両刃、厚手である点において、従来報告の琉球石斧通有の形をなしている。右のうち読谷山村のものは同村字渡具知（とぐち）の湾ペーチン家の庭先で採集とある。この地名は「石器時代地名表」に未載である。以上二七点の他に、八重山郡採集の石斧が三点ある。うち波照間（はてるま）島の二個は打製両頭（島田髻式）石斧であり、黒島採集の一個は磨製片刃のもので、いずれも他郡のものと異なっている。円石、凹石も琉球石器としては通常のものである。うち円石の四個と凸石の

一個は、前記読谷山村渡久地採集。凹石の一個は荻堂、他の二個は出所不明である。

大井氏寄贈の琉球遺物の中には、なおこの他に、浦添城跡より発見した瓦の破片が一四個ある。これには型押の文字で、美酉年高　麗瓦匠造

との二行銘が見える。伊東忠太博士はこの「美酉」を近衛天皇の仁平三年の癸酉と推定した。東恩納氏はそれを疑って、禅鑑和尚が浦添に極楽寺を創建した弘長元年の「辛酉」ではないかと考えたが、銘はたしかに「美酉」と見える。

玉泉教授は以上の見学を許されたばかりでなく、見学中種々説明の労をとられ、貴重な時間を私のために割かれた。これらの好意にたいして、ここに謹んで感謝する次第である。

同校を辞して九大医学部に友人を訪ねた時には、もはや夕刻近くであった。私はこの友人と博多の街に一夕を快く過し、午後十一時四十分、鹿児島への夜行列車に乗った。

3　山崎氏蒐集の石器時代遺物

十二月三十一日。午前七時二十分、鹿児島駅着。早朝ではあったが先輩の医学博士武田元一郎氏を訪う。氏は先年われわれの教室で解剖学研究に従事され、今や業成って故山に自適する人である。久濶を叙して後、懇談数時に及んで辞去した。

次に清野博士の紹介状を持って、平ノ町に山崎五十麿氏を訪う。氏は現在、鹿児島県史蹟調査委員嘱託として活躍しておられる。同県下の考古学的発見並びに研究が、同氏に負うことの大なるは周知の事実である。氏は私の来意を知ると、私のために快くその蒐集品を展べて自由に見せ、かつ多数の有紋土器片の

拓影を採ることを許された。氏はこれらの薩隅遺蹟出土の縄文土器紋様と、松村博士、大山公爵報告の琉球石器時代土器紋様との間には、松村博士の認めるような相違の存する事実を否定するものではないが、またかなりの程度において深い類似を示すものがある、という事実をも否定し得ないとの説を抱かれ、先年渡琉の際にも、親しくその所説を同地方の新聞紙上に発表して、県民の興味を喚起された。しかし本邦南端におけるこれら二地方の石器時代土器が、等しく縄文系統土器に属し、ともにそのはなはだしく退化したものであろうというのは、誰しも異存はないと思われる。

山崎氏の蒐集中には、これらの土器片ばかりでなく、多数の石器、骨角器等を含んでいるが、その多くは以前同氏の手によって、考古学雑誌に発表されたものである。中に未発表のものとしては、同県甑列島中の甑島下甑村字手打発見の、弥生式系統に属すると思われる土器、土器片、角牙器、獣骨、魚骨および人骨等がある。これは同島手打小学校の二宮氏より山崎氏に送られたもので、出土状態は明らかではないが、井戸掘りの際に偶然発見されたものだという。人骨は右側大腿骨下半と上顎骨の小破片とを存し、その量は貧弱ではあるが、質はさほど脆弱ではなく、むしろ有望の遺跡と思われる。土器およびその破片は挿図のようなものであり、図中2は表面丹塗りで、腹部に比較的大きな単孔を有するものである。角器は3のように、鹿角表面（偏側）に平行的の横線を多数刻んだもの、また図示は略したが、牙器はおそらく猪牙であろうと思われる。獣骨は鹿の下顎

甑島発見の石器時代土器と鹿角器
（山崎氏の写真による）

骨多く、魚骨は鮫類の顎骨、椎骨等があった。本遺跡ならびにこれらの石器時代遺物については、今後精しく調査する必要が十分あるであろう。

山崎氏は以上の他に、なお一個の琉球石斧（国頭郡某所表面採集）と、同じく琉球現代人頭蓋骨（同郡運天港採集）とを示された。石斧は円味ある両刃の通常品であり、頭骨は清野博士所蔵の運天頭蓋（近時金高勘次氏発表、「人類学雑誌」第四四巻第八号）とほぼ同一型に属すると思われた。本頭蓋並びに前記甑島人骨は、同氏の好意により清野博士に提供せられたから、近く調査の運びに至るであろうと思われる。

以上の見学に思わず時を過し、正午近く始めて同家を辞し、同氏の案内を煩わして、城山の麓の薩摩屋敷別邸と称する旅館に入った。旅館は山を負って東南に面し、市の大半および鹿児島湾を双眸に収め、桜島に相対して、風光絶佳と言ってよい。氏とともに昼の食膳に向ってなおも談笑すると、折しも南国の明るい日光は畳の上に射しこんで、大晦日とも覚えぬのどかさ、暖かさであった。

4　大晦日と元朝

私は九州の地における予定をほぼ終了したので、今や翌元日の出帆を待つのみとなった。そこで汽船会社に翌日の出帆の時刻等を問わせると、意外にも出帆は二日に延期したとのこと、その理由は、翌日は元日であるからとも取れ、天候の都合によるとも思われた。現に午後に至って、低気圧の来襲を予報するかのように、細雨はしばしば行人の袖を濡らした。理由はいずれにもせよ、とにかくは今一日を鹿児島に過すこととなったのである。これは日程を急ぐ私にとって、はなはだ迷惑なことであった。そしてこの事情は私に山崎氏の慫慂に従い、次の一日即ち元朝を、薩南指宿（イブスキ）の遺跡見学に過そうと決意させるに至った。

食後山崎氏の案内で、微雨を冒して城山を一巡する。冬とはいえ緑樹多く、南国の気分が濃厚である。山を下れば石墻は連なり、朱欒は枝もたわわにその上に垂れている。やがて山崎氏と別れて町に出ると、流石は大晦日、人の往き来も繁く、この地方特有の山形の鞍を置いた駄馬が、細雨の中を鈴の音を鳴らしてゆくのも面白い眺めであった。この鞍は後に琉球でも見た。市場を通ると大魚の氾濫である。骨董屋がある。ここで薩摩焼きの古いものを尋ねたけれど、それはなくてかえって北海道アイヌ婦人の首飾りがあり、主人がアイヌ流に、これをはなはだ貴重なものと思い込んでいるのは最も面白かった。山形屋という鹿児島唯一のデパートメントがある。琉球絣、琉球陶器、泡盛などをも売っている。午後はこんな見物に過して宿に帰り、夜は前夜の疲れのために早くより寝に就いた。

昭和四年元旦。神楽と拍手の音で眼がさめる。窓外の木立を隔てて照国神社というのがある。これは島津斉彬公を祀る御社である。元朝の森厳な気に触れる機会は得難いものであるから、起きて詣る。数人の神官はたなつ物を捧げて御階を上下している。これに太鼓と数人の笛とが単調な節奏を送っている。夜は未だ明け離れない。突然に一人の神官は大声をあげて「おう――」と叫ぶ。いかにも隼人の社らしい感である。のみならずこの時下の方より「えいえいえい」と掛声がして一団の少年隊が登ってきた。見ると兵児姿というか寒稽古のような風をしている。これが神前に近づくと、立ち停って一斉に教育勅語を唱え出したのには驚いた。私は薩摩のある断面をここに見る思いがした。これは私が迎えた多くの元旦中、最も感銘の深い朝である。初日は漸くさし出でて、境内は次第に明るくなった。

朝宮のまだきにをればみてぐらの　白さまさりに初日さしきぬ

とはこの時の実景である。

5　指宿行

宿に帰って屠蘇雑煮餅を祝い、八時に門を出て、指宿行き乗合バス中の客となった。元旦とはいえ乗客は満員で、私はその片隅に辛うじて方尺の坐席を得たに過ぎない。そもそも指宿は九州南端の石器時代遺跡としてよりは、むしろ好適の温泉地として同地方に有名である。彼等の多くはこれを目ざして新春の行楽をなそうとするのであろう。しかしこの日の天候は、決してこの行にふさわしいものではなかった。行程十三里、途上しばしば車体は風雨の洗礼をうけ、私は車窓の隙間風を避けるために、頤を襟に埋めなければならなかった。十一時摺ヶ浜着、偕楽園という温泉宿に入る。宿は案じていた通り、新年客のために雑踏し、辛うじて一室を得る有様であった。装を解くと早速一風呂浴びる。温泉は海浜の砂中に湧出する高熱泉であって、一定度の冷却の後に、これよりやや高所に設けられた浴槽中にモーターで汲み揚げられる。フォード車上に揉まれ冷えきった身を、この浴泉に伸ばし暖めて、始めて蘇生の思いをした。

昼食後、宿のボーイに案内されて、微雨の中を指宿包含層に赴く。本遺跡はただ九州最南端の遺跡である点ばかりではなく、火山灰層を隔てて上下二層に、異系統の文化に属する両種遺物を包含する点において有名である。そのため従来これを調査し、あるいは訪問した学者ははなはだ多く、その存在は広く天下に知られている。とりわけこれを記載して最も詳細かつ興味深いものは、「京大文学部考古学研究報告」第六冊における浜田博士の筆である。これによると下層の土器系統はいわゆる縄文式に属し、上層は弥生式に当るという。土器のほかには円石、凹石等少数の石器が発見されている。ここにあるかの「自然の縦穴（トレンチ）」と記された深い渓谷の底を踏み、歩くこと数町で同地点に達した。ここは一部分、近年に至って小松が移植

されたと思われ、崩壊によって生じた斜面は今や松を点じた芝生と化している。私はその一隅、極めて最近に、やや大きい木根を起したと思われる、雨に洗われて黒土の露出した一小区域において、ほとんど大きな努力なしに、少時間中に数十個の土器片、石器等を採集した。土器はいわゆる弥生式系統のものであって、下層の縄文土器に至っては、一片も得ることができなかった。これは残念ではあったが、一つは雨中さらにこれを発掘することの困難と、一つは芝生の美観を損ずることを恐れたので、以上の採集品を携えて宿に帰った。すぐ入浴、手足の泥土を洗い流すとともに遺物の泥を洗った。採集土器片中には厚いもの、薄いもの、高杯の高台、あるいは同上底部と思われるもの、また口縁部と思われるもの等があった。そして後者に属するものには中に、有紋のもの数個あり、平行的直線模様、爪形模様、点線模様、または紐状の浮模様等を見た。石器は二個、いずれも青味を帯び水成岩と思われる石質で、一つは扁平な円形凹石、一つは卵形の敲石で、中央はやはり凹んでいる。以上はどれも前記浜田博士の報告書中に記載のものと大差がない。

この夕べ、はからずも鹿児島市の宇野規矩次博士にこの宿で対面した。同博士には足立博士より紹介状を得て来たのであったが、遂に訪問の機会を失って残念に思っていた折であったので、この奇遇を喜んだ。勧めに従って夕食をともにし、種々興味ある談話を聴いて時の移るのを忘れた。夫人および二令嬢同伴で、ことに家庭的団欒の興趣を味ったのは、私にとって予期せぬ幸福であった。それだけではなく、翌朝私が指宿を去って再び鹿児島に引返す時には、琉球要路のひとびとに数通の紹介状を記して私に与えられた。これがそれぞれ私の目的の上に、有効に働いたのはいうまでもない。今これらの懇情に対して、私は心からの感謝を捧げたい。

同夜は濤声枕に通い、眠りを妨げられがちであった。

薩摩潟みちくる潮のしほ鳴りの　なる音を高み夢しげき夜や

6　薩摩の顔

一月二日。午前十一時、私は再びフォード車上の人となって指宿を辞した。指宿付近には有名な山川港があり、その他有数の火山地域とて、地質学上見学すべき所は少なくない。しかし私はこの日琉球に向う船の出帆することを信じていたから、すべてを割愛して一路鹿児島に向った。

車窓より瞥見すると、薩南の民家はいわゆる四注作り多く、それもよほど棟が短くて四錐形に近い。したがって家のプランは正方形に近い矩形が多いと思われる。これらは朝鮮ならびに後に知った琉球民家とよく類似している。車中たまたま朝鮮の客があって、しきりに天孫民族の朝鮮出発説を説いていたのも面白く、その話相手なる薩摩の老人は、明治二十七年の仁川沖海戦より黄海、威海衛海戦等の昔譚を始め、一つの郷土的風味を漂わせた。おりしも車外に異様のいでたちをした一行を見た。その老人の説明によると、これは「棒踊り」の一行である。彼等は十六七歳前後の少年で、頭には白い鉢巻きを締め、その両端はあたかも美豆良（みずら）のように両顳顬部に挾まれて垂れている。顔に薄化粧をし、とくに鼻梁に濃く白粉を塗る。黒いマントの下には女のように華美な長襦袢を着、足には白足袋、赤緒の草鞋を穿き、手には反柄の大きい太刀らしいものを持っている。その柄は五彩の紐で美しく飾り、その紐は長く垂れている。ただし棒踊りはすべてこんな風体をするものか否かは聞かずに終った。

二時鹿児島に着き、薩摩屋別邸に入る。そして汽船会社に出帆の時刻を問合すと、天候不良のため本日も出航不可能とある。湾内の波浪は比較的静穏であるから、私はこの理由をはなはだ臆病であると憤った。しかし後に聞くところによれば、この日五島沖で台湾通いの一汽船が難破している。湾外の波の恐るべき

ことはこの翌日私自身も体験した。とにかく今一日を鹿児島に過すこととなった。私はこの夕べを市街の観察に費すことにし、正月気分の横溢している市の盛場、天文館通りを逍遙した。

元来鹿児島には美人が多いということをしばしば聞く。美人は深窓に多いものであるから、おそらくこの言は本当であろうと思うが、少なくとも正月二日の夜、天文館通りをぶらつく市井の徒には、美人に遠いものが多いと見られた。これはしかし同通りに店を開いてゐる五、六軒の写真屋の陳列写真を、ていねいに見て歩いて得た結果とも一致しているようである。その印象を書き表わすと、一般に顔面は身長に比して著しく大なるような気がする。胴は長く脚は短い。身長は一般に低く、手足は短広である。頭形は円頭に近くてやや低く、顔は低広、顴骨は出ている。外鼻は低広、下顎も低く、頤の突出は著しくない。皮色は一般に比較的濃く、頭髪は軽い波状を呈するものが比較的多くある。すなわち北九州とは一見はなはだしく異なる感じを受ける。そして以上の記述は、ベルツ博士が現代日本人を「長州型」「薩摩型」の二型に分けて記載した、後者の型式によく相当するものである。私はここにおいて、はなはだしく突飛な感じを与えるベルツ博士の分類法も、まんざらではないとの感じを抱くに至った。ただしこれは薩摩人の一般的傾向を指すものであって、もとより一人で以上の全性質を具備するものが多いとの意味ではない。

7　尚古集成館と琉球関係の陳列品

一月三日。今日は天候もおさまり確実に出帆することとなった。出帆は午後であるから、午前中を島津公爵家の尚古集成館と磯別邸の見物に費すことにした。前者は後者の一部分に在り、後者は市の東北端にある。そして市内よりこれに乗合バスの便がある。私は早朝これを利用して、まず尚古集成館を訪ねた。

本館の陳列品はこれをほぼ武器、美術工芸品、古文書、古刊行書等に分けることができる。

武器には明治維新前後の珍奇な発火器が多く、具足、甲冑、刀剣の類もあるが、これには昭和三年五月、東京美術倶楽部で私の見た島津家伝来の古刀剣に類した絶品はなかった。ただ薩摩流の拵えは面白く、剛毅の風は自らここに現われている。慶長十九年大坂の役に、島津家久が官臣国頭左馬頭正弥、実は琉球人馬瑞彩に与えた武器でもないかと注意したが、これは見なかった。

その他の工芸品としては、いわゆる薩摩硝子の切子細工と、薩摩の御庭焼が面白く、古文書は天文頃より慶長年間、とんで維新前後のものが多い。琉球関係のものは比較的少なく、二、三の古地図を有するくらいのものである。中には島津久光公自筆の「薩隅日琉絵図」なる折本がある。彩色し細字で地名が記入してある。

絵画には児玉氏蔵の「異国船図」一幅がある。児玉氏の祖宗八が弘化元年、異国船掛書役として琉球在勤中、かの地の画家に写生させたものとある。いわゆる紅毛船を写したもので、泥絵風の描き方である。例えば海面は藍絵具で塗りつぶし、上に胡粉で波濤を描く類いである。筆力はむしろ弱い。江藤氏蔵の「琉球爬龍船図」も同様無落款、しかも何の説明書もないが、その筆致はやはり同規に出て、確かに琉球画家の作品と思われる。島津家蔵「世界人物図」一巻は比較的新しく、密画で色彩美しく、当時知られた世界各国人の風俗を描いている。首尾を見ないので筆者等を詳かにし得なかったが、中に「琉球人」を描いた部分がある。高貴な服装をした男女二人物と従者一人を描いてある。その服飾は恐らく写生である。次に琉球には関係ないが、上原氏蔵筆者不詳の「上原長門守像」が一幅、これは「天文十九年」の賛があり、写生に近いものと思われる。その顔貌は前記薩摩型の典型的なものがあって、はなはだ興味があった。他に一、二琉球ではないが、種子島出身画家の山水、花鳥等あり、有名な木村探元の山水等もあったが、

これらは概して傑作は少ないように見られた。ことに探元は昨五月、東京で十分に見た眼にはこう察せられた。

薩摩藩刊行の琉球関係書は二、三に止まらない。例えば宝暦九年の『琉客談』、天保三年の『琉球奇譚』、天保四年の『質問本艸』等が有名である。これらは幸いにして本館に陳列されている。中に『質問本艸』は琉球人呉継志が十数年間の苦心の大著である点に敬意を表した。これらについては武藤長平氏の『西南文運史論』に詳しい解題が載っている。他に種子島人平山武世著『漫遊詩稿』一冊（文政元年刊）、天保八年長崎津開版『万国人物絵図』等がある。後者は京大所蔵のものと同一である。また弘化二年版『四書』には、琉球学者尚元魯の跋文があるとのことであるが、これは見残した。

他に琉球関係のものとしては古銭が少々ある。鳩目銭は見なかったが大世通宝、世高通宝、琉球通宝の三種を見る。後者はざらにあるものであるが、世高通宝は得難いもののよしである。世高王尚徳（後花園朝の頃）の治世に鋳造されたものである。他に朝鮮、安南等の古銭もあった。

以上の見学に意外の時間をとったので、磯別邸の庭園には長く止ることができなかった。邸は万治年間、久光公の経営に係る。今は浜街道に鉄路を通じてやや風趣を欠いたが、前に蒼波を隔てて桜島を眉間に望み、ここに佇めば自ら気宇の壮大を覚える。邸中の椰子、棕梠、竹の類は美しく、南国の気分がはなはだしい。邸の中央に望嶽楼がある。これは中国風に磚を布いた四阿であるが、琉球王より藩主に献上したとの伝説がある。

以上の見学を終って宿に帰ると、日は午を過ぎてすでに久しい。倉皇として旅装を整え、大阪商船会社の桟橋に向った。

8　天草丸

鹿児島那覇間の航路は、六日間に二往復、すなわち両港より三日ごとに各一隻の汽船が出る。当時大阪商船会社の天草丸と首里丸の二隻がこれに当っていた。いずれも二〇〇〇トン弱の汽船で、このうち私が便乗したのは前者である。三日午後三時、天草丸は正月気分に浸っている鹿児島の町を後にして、港外に滑り出た。湾内の波はこの日も静穏である。

天草丸の機関長阪本氏は琉球通であり、同氏に対しては山崎氏等より紹介状を得ていたので、私は早速その室を訪問した。氏はまるで魔術師のように狭い船室の隅々より、その左右に愛玩される琉球器物を私の眼前に拈出し、私の質問に応じて倦むことなく説明された。その多くは現今、那覇市波の上在住の陶師、黒田理平庵氏の製作に係るもので、以前京阪地方の市場に紹介されたもの、または鹿児島市内に見たもの等と同一系統のものである。ただしそのやや優秀なものを始めて知ったのである。黒田氏は京都五条坂の出、その洗練された技術を携えて数年前渡琉、これを彼の地の材料の上に試みて、琉球陶器の新興を計りつつある人である。阪本氏の所蔵品中には、この他に琉球男子使用の銀簪が一個あった。それは今日同地方婦人の使用するものよりはるかに長い。おそらく薩藩統治以来、武器の所持を許されなかった琉球人にとっては、両個の手挙以外には、これが唯一の武器であったであろうと、これは阪本氏の談である。私はこの会見により多大の利益をえたことを謝して、同氏の室を辞した。甲板に出れば桜島はすでに船尾の方に退き、夕陽の傾くところに開聞岳の雄姿を見た。

船の湾外に在ることは、夜半夢寐の間、とみに増して来た身体の動揺によってこれを知った。この動揺

の激しさは、私にとって空前の経験であった。

一月四日。朝食時軽い船酔いを感じたので、船室に籠り牀上に横臥した。午前十一時、奄美大島名瀬港に入る。私は出帆までの数時間を利用して名瀬に上陸しようと、艀の上に身を移した。この日天候は曇り、時に霽れ、時に微雨を見た。風はほとんどない。

9　奄美大島のひとびと

艀が陸に近づくにつれて、海浜に立つひとびとの顔は次第にはっきりとしてくる。私はたちまちにして彼等の面貌に一種特有の相格を見たのである。そもそも奄美大島人の体質については、古くデーデルライン博士やベルツ博士が、その生体観測を基にしてアイヌ人類似の説をなして以来、ほとんどこれが常識的となっている。沖縄出身の伊波氏なども、『奄美大島民族誌』（茂野氏著）の跋文において、これに有利な説を詳細に述べている。つまりこれらの説から導き出された常識的結論は、九州南端にいわゆるアイヌ式石器時代文化を遺した人種は、後来民族によって南島に逐われ、ここにいわゆる琉球石器時代遺物を遺した。これと同時にその体質を現今南島民中に伝えた。その最も濃厚なるものが奄美大島人であるということになる。先年東大人類学教室の大島昭義氏は、同島男子九二名の生体計測の結果を「人類学雑誌」（第四三巻、第八号）上に発表された。同氏は直接これとアイヌ人とを比較されなかったが、その結果によると、以上の常識的結論は多少疑わしくなる。第一、われわれが目測によって著しく特徴のように考える諸点は、必ずしも統計数の上には、さほど著しく現われてこないのである。氏の結論によれば、島の南北によって住民の体質上に多少の差異はあるらしいが、全体としては沖縄県人に対するよりも、九州鹿児島県人に近

い関係があるようであるという事である。薩摩の統轄以後、今日に至る数百年間、大島は南方よりもむしろ北方との交通が頻繁であった（茂野氏『奄美大島民族誌』）のを思えば、この結論のような事実の由来するところも肯かれる。あるいはそれ以前の古い時代において、あるいは両民族発生の当初において、両者の間に何らかの関係があったかも知れない。ただし計測統計の結果が、以上のようになったからといって、直ちに同島民に特有の風貌が存在しないというのは当らない。大島氏の結果についても見られるように、島の南北の差、および薩摩人に比較的よく類似する島の北部の材料よりの計測数には、変異の度が著しく大きい点などは、おそらくこの間の消息を語るものであろう。すなわち沖縄との交渉の頻繁であった南方の島民には、比較的独特の体質が遺っていると見られぬこともない。そして旅行者の眼に著しく印象づけられるのも、実はこの種のひとびとであるに違いない。私は以上の予考をことごとく抛擲して、私一個の観察眼に映じた同島民の印象を次に記してみよう。

彼等は身長一般に低く、顔面は中等度より低広に傾き、頭部また短厚である。眉はいかり、身体は頑強の感じを与える。皮色は一般に比較的濃い。顔面において著しい特徴は、前額狭く、顴骨突出し、下顎は広く張っているが、頤部が尖っているために、顔形は前方において縦長き菱形を描き、後方で下の張った矩形をなしている。頬部の脂肪少いものは、ことにこの特徴が明白である。額は低く、眉毛および睫毛は著しく濃い。眉毛は眉間で左右が接しようとし、かつ眉毛眼裂間の距離は短かく、眉間よりこの一帯にやや嶮しい相が見える。眼裂は比較的大きく、いわゆる明眸に属する。鼻は中等以下の低さ、口裂は比較的大きく、口唇は厚い。

以上のうち前額の狭低、顴骨の高さ、眉毛、睫毛の濃厚な点等は、アイヌにいちじるしい特徴であるが、下顎の横張、口唇の厚い点等は、かえって南洋諸族に多く見るところである。もちろん大島人であって、

以上の記載に当らないものが多数にある。また、大島人以外であって、このような特徴を有するものも絶無ではなかろう。現に私は本旅行より帰った後、鹿児島県出身と称する一婦人に以上の特徴を見て、これこそ奄美大島婦人と思い込んでいたところが、聞けば薩摩川内のひとであった例などがある。

私は名瀬町の、さすがは正月らしい静謐の漂った街々を漫歩して、会う人ごとに顔を見定め、あるいは写真館の飾窓をここかしこと眺め歩き、あるいは特に乞うてアルバムを店頭に借覧したりなどして、大島人の印象を纏めたのである。やがて昼食の時となったので、適当の飲食店を求めたが、これはついに見出すことができなかった。名瀬には特に見るべきものが絶無ではなかったであろうが、私は空腹かつ時間の制約のために、書籍、絵葉書、果物、ビスケットの類をもとめて、二時間も早く帰船した。三時出港。前記茂野氏の著書によれば、同島には諸所に風葬場の遺跡があり、今も人骨は海辺の砂中にしばしば発掘されるとのことであるから、私は沖縄地方における予定が失敗に終ったならば、これらの遺跡を訪うつもりであった。そうでなくともいつの日かはこれをなしとげて、奄美大島人の体質をさらに深く究めようとの願望があったので、心中ひそかに再遊を期して、同島を後にしたのであった。

10　那覇入港

名瀬を出て後、私は船中に大阪武田商店の薬学士三宅氏と相識った。同氏は東大薬物学教室の一行とともに先頃台湾旅行を終り、ひとたび九州に帰航して、今また沖縄に向おうとするのである。その目的は薬草の採集にある。山中深く分け入る必要は、人骨蒐集家の上にあるであろうと談笑した。もちろんハブは直ちに問題となったのである。同氏は台湾蕃地の事情等を私の質問に応じて語り続け、船中もてあます時

「琉球の旅」関係地図

間は、こうして知らずのうちに過ぎていった。この日、風は日没後も静穏であったが波は高く、ために夜半の眠りは乱されがちであった。

一月五日。七時起床、直ちに甲板に上る。と左舷に巨大な島影を見る。これが沖縄本島である。七時半朝食、船は次第に島に近づいている。島に近づくに従って波も次第に平となる。やがて海岸の珊瑚礁に砕ける白波が見える。「白色日光に映じ壮観人目を驚かすに足る」と笹森翁が記した墓が見える。これは海岸に沿ってあたかも白堊作りの人屋のように、朝日の下に限りなく連なっている。那覇市外の小禄村にある無線電信局の巨大な鉄塔が聳えてくる。八時、船は遂に那覇港に入った。私は船中で識りあいとなった諸氏に別れを告げ、阪本氏の勧誘によって、那覇市宝来館に投宿するため桟橋を出ると、早くも腕車がやって来て私を連れ去った。

11　那覇の散策

宝来館は市の東北西新町にある。設備万端内地の旅館に異ならない。その上はなはだ親切であると思った。私は入浴の後、直ちに街上への誘惑を拒むことができなかった。この日天候は申し分なく、市街の暖かさは格別である。

船中より那覇の市街を一望した時には、赤瓦本葺漆喰塗りの町家の屋根は遙かにうちつづいて、堂々たる感じを与えたのであるが、市中に一歩踏み入ると、この第一印象はやや稀薄となりゆくのを禁じ得なかった。街幅は概して狭く、かつ不潔の感がある。人家は軒低く、やや不整頓である。ただ南島の明るい日光の下に、榕樹（ガジュマル）の緑は映じてその濃い影を地上に落し、石垣の上に紅の花は輝いて、あたかも夏日の下を

歩む気がする。これは一種の快い錯覚である。見よ、日向に遊ぶ子供は全裸である。これが正月五日の街である。

街上に立って先に目につくものは俥夫の多いことである。そのあるものはのろのろと流し歩いて客を求め、あるものはうち群れて、ここかしこに溜っている。どんな街に立っても、眼を上げてこの光景を見ないところはない。彼等は壮年以上というよりはむしろすでに老境のものが多い。その顔貌は生気に乏しく、眼底にある種の憂愁を読むことができる。次に街上に多いものは小児である。そして婦人である。およそ街上を活発に歩行するものあれば、これは頭上に荷を載せた婦人である。店頭にあって客に接するものも婦人である。こうして那覇は老少婦人の街のような感じがする。青年客気の男子を見ることは、はなはだまれといっても過言ではない。そして、街上風物の一つは移民周旋業者の看板である。那覇市街の小観は琉球の抱いているある種の苦悶を、たちまちにしてわれわれに垣間見せたのである。

路上の人物は多く裸足である。婦人は短い筒袖の単衣を着、細帯を締めている。ただしこれは労働服であるらしい。通常にはこの上に広袖の単衣絣を一枚羽織る。その前を合わせてこれを手に持ち帯をしない。多くは右衽であるが、稀に左衽を見る。藁草履をはいている。頭髪は特有の髷に結う。これに通常アルミニウム製の太い簪を一本挿している。その尖端は前上方、耳の方は後下方に挿す（男性の場合はその反対の方向に挿したという）。中に骨を黒く塗った日傘をかざして歩くものがある。カメラを向けると彼等は早くも察して一様にこれを避けようとする。或いは足を早めて過ぎ、或いは屋内に逃れ去る。

荷物の運搬は上記のように頭上に載せて行く。はなはだしきは手足を縛った小豚を頭上に載せている。嬰児は布で包み懐に入れて正しく前方に抱く。

言語は極めておうようである。こちらの言葉はよく分るが、彼等の言葉を解することはやや困難である。

私は軽装して出たのであるが、以上の観察をしながら歩くこと数町ならずして、早くも肌に汗するのを覚えた。まず郵便局に行って安着の電報等を打ち、写真館、書籍店等を訪ねて、写真、絵葉書、書籍の類を買いこんだ。帰りは腕車を雇う。宿まで十数町のこの賃金は五銭。昼食後再び街に出る。先刻購入した市街地図でほぼ見当をつけたので、まず辻原を通り辻を抜けて波上宮に詣る。辻原は市街中の墓地である。ここに琉球特有の墓は累々と層をなして斜面にかさなり、かつ相い連なっている。この陰鬱な石屋の間には、龍舌蘭の巨大な葉が、あたかも青い焔のように燃えている。辻はこの墓地を斜面とする小丘の上にあって、その名を知られた遊廓である。波上宮は海中に突出した断崖の上にある。ここに停まれば蒼波は脚下に迫り、やがて珊瑚礁に白雪のように砕ける。絶景であると思った。周囲には墓多く、海岸線を縫って遙か彼方までうち続いている。試みに一墓前に立てば、蒼波はその背後にあり、永遠に相い対するような気もするのであった。

波上宮は伊弉諾尊他二尊を合祀するという。社殿は見るべき建物もないようである。付近に真言宗護国寺および道観天尊廟がある。前者の山門はいわゆる唐様で形は美しい。ここより俥で崇元寺に向う。「上り口説」で有名な美栄地高橋を渡り、崇元寺橋を渡ると、街道に沿って右手に壮麗な石門を見る。これが第一門である。門外に有名な下馬碑がある。表に琉文にて「あんしもけすもくまからうまからおれるへし、(按司も下司もここから馬から下りるべし)」、裏面に漢文にて「但官員人等至此下馬」とある。これに嘉靖六年丁亥(一五二七)七月二十五日の銘記があるが、寺の建立年代は明確ではない。門を入ればさらに第二門、仏殿、庫裡、禅室、倉庫等がある。規模は宏壮ではないが、和漢の様式を折衷して、簡素のうちに効果をおさめた手法ははなはだ見るべきものである。私は緑苔の石門に映ずる処、石階を昇り甎道を踏んで長くここを去ることができなかった。寺は尚家の廟所で、舜天王以下歴代の霊位を祀るという。

これより県庁、図書館に赴く。この日は祭日なので、もとより用を弁ずることができるとは思わなかったが、果してその通りであった。途上、見物や買物などをしながら徒歩で宿に帰る。

12　沖縄の劇場(I)

夕食後、宿の新聞紙を借覧すると、「琉球新報」というのに、「寂れた芝居と活動の全盛時代」という見出しで、次の記事が掲げられていた。やや繁雑にわたるかも知れないが、後述の参考のため、全文を載せることにする。

本県の芝居はとんと寂れた。景気のよい寒水川(すんがー)芝居の物語りを偲べば、うたた感慨に耐えない。羽振りの良かった役者達の生活も、今ではドン底に蹴落されて見る影もない。それに変る活動の全盛時代である。本県の芝居は確かに行詰った。役者達が声を枯らして昔ながらの『歌劇』や観衆をニガ笑いさせるだけの『狂言』で、どうして新時代のお客さんが釣れよう。……活動に極まる。今では頑固な老人やタンメー、アンマー連中までヤレ坂妻がいいの否伝明が好きのと言い、『寄らば切るぞ!』の剣劇や新井、小泉等の喜劇物にヤンヤ拍手を送るようになったが、さて芝居の没落と活動の景気を数字で明かにして見よう。これは那覇署に届けられた昨年一月から十一月迄の観客数である。

活動	芝居		活動	芝居
一月	三四三一〇	四三五四	四月	三〇三八一
二月	一八六八〇	一四三三	五月	二二八四四
三月	三六六六〇	八一〇一	六月	二一三八九

七〇三四
六六四二
四二〇八

七　月　二〇九四一　五二四一　　十　月　二五〇一四　九三八八
八　月　二七八四〇　九二六四　　十一月　二六一七〇　四六六九
九　月　二四八〇三　八九九二

この記事にまず興味が引かれたのには訳がある。私はかねて、琉球には「組踊」という古舞踊劇や、あるいは多くの民踊が存しているということを聞きおよんでいたが、前者がどのような場所で、どのような機会に演出されるものであるか、沖縄の民衆はこれらの舞踊の他に、何らの劇的芸術を有しないものであるかどうか等の点に疑問をもっていた。もっと古く鳥居博士が「彼等の興行している芝居を見た」記事（横山健堂『薩摩と琉球』三二九頁）を書かれたのを見ると、当時舞踊劇の他に、南島の伝説を取扱った「ウヤンマ」という悲劇のようなもののあったことが知られ、また伊波氏等の記事によっても、組踊りの出現以来、「市の劇」「村の劇」等が興り、そのあるものは今も残存しているということであったから、おそらく今なお市井の間に劇場があって、民衆の観劇心を満していると想像していたのであるが、この想像は、これを導いた上記の著者等の記事が漠然としているのと同程度に、極めて漠然たるものであった。田辺尚雄氏その他の人によって、琉球の名優は世に紹介されたが、彼等は常に名士招持の酒席に興を添える名優であって、その劇場は未だ充分に紹介せられていない。彼等の劇場は、あるいはすでに没落し終ったのではあるまいか。

私はこの新聞記事を見るにおよんで、始めてこれらの疑問がやや釈然としたのみならず、女中の口より、今宵も開演されている劇場が宿の付近にあると聞いたので、沖縄の最初の一夜を観劇に費やそうと考えた。一月の夜とはいいながら、外套も着けぬいでたちで、身も心も軽々と宿を出る。

劇場は宿より北二町、辻遊廓の付近にある。大正劇場という。建物の外観は、通常田舎町に見る劇場と変りはない。二十銭の木戸銭を払って中に入ると、観客はすでに多数つめかけていたが、なお開幕前であった。すなわち、これも田舎芝居に普通見る夜芝居である。引幕には「伊良波一行」と染めぬいてある。観客は女が多い。男がおれば多く老人で、私の年輩のものはほとんど見当らない。私が躊躇してついに坐りかねたあまり清潔ではない敷莫座の上に、彼等は行儀よく坐っている。女性の多い観衆としては不思議なほど喧騒でない。

劇場の内部の大きさ構造も、普通の田舎芝居の小屋と変りはない。大きさはまず本舞台三間というところであろう。観客席には桝はないが正面、左右には二階があり、花道、仮花道もある。花道には奈落もあり、廻り舞台の装置もあるらしい。ただしこれはその後数度見物したが、一度も使用されたことがない。おそらくこれを廻す手数を要せぬほど、舞台装置が簡単なためであろう。

私はこの開幕前および幕間の時間を利用して、観客の姿態、相貌を観察するのに努めた。これは私の観劇の重要な目的の一つであったからである。これによって沖縄の女性の風貌はほぼ察することができた。その詳細については、後述に譲ることにしよう。

やがて蛇皮線の音が鳴り出して、幕が開く。柝の音は入らない。番付はなく、下手の舞台の端に狂言名題が懸って、ちょうど能の見付柱のような体裁である。これに「茶仁」とある。その意味は不明。後にきくと、旧藩時代の役名であるという。

開幕すると立木の模様を描いた道具幕。その前に姫君、その老侍女一人、日傘を相合傘にかざしている。すべて女形。服装によって旧劇であることがわかる。何か言う。言葉は判らない。突然唱う。歌劇のようなものである。入る。柝なしにて道具幕が落ちる。舞台中央に朱の鳥居、左右は玉垣、奥に書割で遠見の社殿、海、すべて昼間見た波上宮そのままの景色である。ただし道具は粗末である。下手玉垣の前に床机が一つ。ここにさきの二人の女性が出、その若い方と恋仲になる若者が出、敵役の侍などが出て、事件の

発端となる。科白はほとんどすべて節がつく。これに蛇皮線、時には太鼓が入る。いずれも節奏は単調である。役者の仕草は嫌味のないところをとる。概して淡々とやってのけるうち、一定の型を守っているらしい。若い方の女形は顔もよく、女形としての修養もよほど積まれている。後にこれが有名な儀保松男君であることを知った。鳴物師はすべて舞台に現われない。

「茶仁」劇は四幕で終る。幕間は短い。第二幕は金城(かなぐすく)按司の邸、この場で前幕の侍どもの讒訴により、さきの恋仲の男女は詮議をうける。女は按司の娘であるらしい。男は情ある取計いをうけ、侍どもは却って叱責される。按司は始終高相引にかけている。この幕は音楽、唄はなく、すべて科白だけ。第三幕はかの侍どもが按司を殺す。娘は追われて老女とともに山中に入る。山中には白髪白髯の仙人あるいは術者のようなものがいてこれを救う。仙人の風俗は歌舞伎劇に見るものと同一である。術によって赤鬼、狗を使い、悪侍どもを逐い払う。この鬼は赤の縫いぐるみ、腰簑をつけ、額に一角を載き、棒をもつ。狗は黄色の縫いぐるみ。顔面奇怪で天狗とはこんなものかと思う。この幕の後半ほとんど無言劇、太鼓は始終大どろどろである。立ちまわりの型はやや特異。第四幕は世話場が主で、仇討ち、縁組みでめでたしめでたしとなっている。節は単純である。この場では、落魄した老女が農家で餅を搗く風俗と、我如古弥栄という三枚目役の俳優の技が目についた。餅を搗くには、女二人向きあい、独鈷形の手杵をもち、鼓形の臼を中に据えて、歌いつつ交互に搗く。

後に聞くと「茶仁」は新作劇である。そして前出新聞記事中の歌劇に相当するものだということである。所作はやや特異のものがあるが、中に歌舞伎の型を踏用したものが少なくないと思われた。観客は概して静かであるが、あまり熱心な態度でもない。

次の舞踊である。「あやぐ踊り」とある。背景は道具幕だけ。始めに男女四人づつ、後に男四人、都合

十二人の団体舞踊である。この三組はそれぞれ特異な扮装で、女形は筒袖の長い衣裳の上に袖なし半纏のようなものを着け、頭に赤い鉢巻をして、その端を後ろに腰まで垂れる。手に四つ竹。始めに出る四人は、赤い筒袖の腰までの上服、裳は白紫鉢巻を右横に結んで、膝まで垂れている。後に出る男四人は、服色黒白、袖、掌短く、白鉢巻を短く後ろに結び、脚に格子縞の脚胖をはき、左脇に小太鼓を抱え、右手に小さい撥(ばち)を持つ。服装動作は活発で、女群および第一群の男四人に対して対照的である。音楽は蛇皮線、太鼓。この踊りの順序はおよそ次の通り。

(1) 下手奥より男群、女群、四人ずつ、二列縦隊で現われ、上手前方に進む。男女ともに手振りあり。
(2) 正面に向き二列縦隊。(3) 上手に寄り二重半円を描き、下手に向う。下手より大太鼓現われる。
(4) 大太鼓中央にくる。これを取りまき八人一列の円陣となる。次に八人同時に太鼓の下に寄って各二本の撥をとる。また開く。(5)(6) 男女四人ずつ交互に太鼓を打つ。打たぬ組は太鼓と同時に撥をうち合す。(7) 再び一列円陣。(8) 太鼓を中に斜めに両群二列に別れて開く。太鼓上手に去る。これを追うように下手より男の二群が出る。これより活発な掛声が入る。(9) 三列縦隊、(10) 同正面に向く。
(11) ―(13) 各組三列のままで交互に入れかわる。(14) 下手の列より舞台前方を廻って上手奥に進む。他の二群舞台後方より廻ってこれにつづく。一列縦隊。(15) 同隊形で上手奥より漸次入る。(9) 以下ときどき全群声をそろえて「エンヤラスーウリ」という。そして第二の男群はこれに合わせて左手の小鼓を打つ。

この踊りは純然たる民踊であって、舞台芸術というべきものではなかろう。しかし民踊としては実に面白いものであると思った。

第三番目は現代劇「泉さん」これは二幕ばかりの現代喜劇である。もちろん新作物であろう。やはり歌

劇であるが、評すに足らぬものである。ただそこに展開される事件が、中学校卒業生と女学校卒業生との結婚問題、高利貸、差押え、出稼ぎ者の成功等、現代沖縄の世相の一面を示すと思われる点において多少の興味がもてる。ただし観衆には、これが最もよく受けていた。

最後に「一つ家琉球故事（鬼婆）」という名題が出る。以上の見物でかなり疲れたが、これは面白そうであったから、止って見ることにした。

これは夫とその情婦とに欺かれて海上に捨てられた女が、忠犬に助けられて溺死を免れ、島に上って女児を生む。以来鬼婆となって旅人を殺し、娘と犬とを養う。後、一青年がこれに捕われたが、娘と相思の仲となってともに住む。この青年の父は軍勢を率いて鬼婆を退治する。鬼婆は娘の将来を托して死ぬ、という悲劇を取扱った三幕ものである。これは歌劇ではなく、全部科白でゆく。俳優も力演して、相当面白く見られる。主役の玉城盛義君は、琉球団十郎といわれた玉城盛重氏の血を引くだけに、はなはだ巧い。かつ熱心である。我如古氏の道化役も巧い。この劇中には、明らかに歌舞伎劇には見られぬ所作が種々見えて、興味があった。例えば別れを惜しむ仕草に、腕を肩の高さにまっすぐ前方にのばし、手を上下に動かす振りは、これを団体的にやると特に異様に見える。私はこれを見て、本旅行に出発する前、京都で見たアイヌ人の熊祭りの中に、彼等が殺した小熊の霊の離れゆくのを惜しむ動作と、全く同一であるのを直ちに認めた。軍兵の行進の所作がかった振りも、またはなはだ異様に覚えた。

以上七時より十二時前まで約五時間の見物に、身体ははなはだしく疲労したが、同時に多大の感興を覚えて、快く宿に帰った。

部屋には蚊帳が吊られている。私は正月蚊帳の中に臥すという馴れぬ経験や、今見てきた琉球劇の舞台よりの感興などに、暫くはいも寝やらず、沖縄の第一夜をふかしたのである。

13　沖縄の劇場（Ⅱ）

前章で、沖縄劇の見物記を書いたついでに、その後に得た知識を集めて、ここにその今少し詳細な内情を記すことにしよう。これは主として那覇市役所の上間正敏氏の談より得たものである。ただし系統的に秩序立って尋ねたわけではなかったので、はなはだ不統一かつ粗雑に流れるかと思う。また折角の談話を聞き違った点があるかも知れない。

沖縄の民衆が民踊の他に、科白のあり筋のある演劇を知ったのは、享保年間、踊奉行の玉城朝薫が五組の組踊を創作した後のことである。それも当初は、宮廷劇のいわばおこぼれを頂戴して満足するに過ぎなかったが、民間にこれを模放するものが続出し、曲目も増し、町村に劇場もでき、こうして民衆劇が起ったわけである。明治に入って宮廷劇が廃されるとともに、劇は完全に民衆のものとなった。古典の五組の他に、準古典とも称すべき多数の民衆化された組踊りが創作されたが、民衆はさらにより民衆的なものを求めた。今日の組踊でない琉球劇はこうして起り、劇場は民踊とともにこれらの各要素のすべてを演ずる場所となったのである。

那覇の劇場はもと中座、球陽座、沖縄座の三座があり、俳優も多く、十数年前はちょうどその最盛時代を現出していた。ところが大正八年辻の大火に球陽座のみを残してあとは焼失し、中座はその後大正劇場として改築されたが、最早昔日の隆盛を見るに至らず、以来しばらく不運続きで今日に至り、先の新聞記事に見るような不景気時代となったわけである。現今の青年は活動写真館に走る。彼等の憧れを繋ぐ幻は舞台上より消え去ったのである。

古い沖縄劇場の構造としては、（宮廷劇場の図はしばしば見るところであるが）民間興行開始以来、七年後の劇場図というものが昨年十月発行の、伊波氏「琉球戯曲集」に掲げられている。これを見ると舞台は方三間の神楽舞台のように、三方に観覧席がある。観覧席には、桟敷、高桟敷、婦人席、土間等の設けがあり、楽屋との間には幔幕を張り回すのみである。その中央に老松の立樹を飾り、段切といえども道具を変えない。また、幕を用いず、戯題を記した板札を舞台正面の柱頭に掲げるのみとある。これは永久的のものであったか、否かを知らないが、私が見た球陽座の構造はややこれに近いものがある。

球陽座には、後にできた大正劇場のような花道はなく、舞台三方に観客を容れる。向って左手奥に楽屋より舞台に通じる橋掛りがある。二階桟敷はなく、平土間の中央には、一区画の仕切りがあって特に上等席としてある。道具をかえ、引幕を用いることは他と変りがない。これで見ると球陽座は原始的琉球劇場の形を存しているものである。

これらの劇場では現今、民踊および組踊りとして書物に載録されているものの他に、前記民衆劇を演じる。新作を上演することもある。組踊りは特に観客の所望ある場合に演ずることが多い。所作ではない、多少観客に親しみのある民衆劇には、いわゆる今帰仁由来記、大新城忠勇伝、謝名親方、国頭左馬守。島我那覇、浦添真山戸、黒金座主、阿摩和利、普天間権現由来記、中順流、仲里節、波照間真武羅等、琉球史上の出来事を取扱った史劇がある。また、薬師堂、泊阿嘉物語、奥山の牡丹、思案橋、白蛇黒蛇、松の精のような、琉球伝説を取り入れたいわゆる歌劇がある。前者は科白劇にて諷を入れず、狂言という。後者は名のように諷を加えて歌劇風のものである。これらの劇には一定の台本のようなものがなく、ただ口伝、記憶によって演じているらしい。当局へは簡単なる筋を記して届けでる。他に忠臣蔵や不如帰、金色夜叉等を琉球語で演じたりする。また現代作家の新劇を、琉語に移して、研究的に演ずることもある。

菊池寛の「父帰る」、「貞操」、「屋上の狂人」、谷崎潤一郎の「無明と愛染」、久米正雄の「牛乳屋の兄妹」、額田六福の「真如」、有島武郎の「断橋」などは好評を博したという。ただしこれは研究劇ないし招待劇である。普通興行ではない。試みに普通興行として伊良波一座が昭和三年七月より同年末までの半年間に演じた狂言を順次掲載すると、次のようになる。

（1）染屋、（2）八重山行、（3）契りの松、（4）人形、（5）牧湊乙女、（6）冠船の後、（7）間抜、（8）子の審き、（9）千手観音の救い、（10）継親念仏、（11）許田の手札、（12）黒島物語、（13）布哇金、（14）梅と桜、（15）生さぬ仲、（16）秋日和、（17）義理の柵、（18）濡衣、（19）不縁の夫婦、（20）仙人の舞、（21）仲順流、（22）残された仏像、（23）白蛇黒蛇、（24）冥土の母、（25）親の売物、（26）逆戻り、（27）秋の愛、（28）与那国鬼虎、（29）師の大歓、（30）恵まれぬ兄妹、（31）大口津口、（32）新已ケ罪。

以上のうち多くは新作である。しかし、これがすべて前記「泉さん」程度の低級なものであるとすれば、心ある観客が劇場を見捨てるのは無理もないと思う。

14　沖縄の劇場（Ⅲ）

沖縄の劇場には興行師というものはいない。俳優は自身興行師であり、作者であり、鳴物師まで勤める。彼らは劇場の持主に一定の家賃を支払うので、もしより有利な条件を提供する他の劇団が現われたら、彼等は直ちに劇場を追われる。宿なしとなった役者は休業するか、地方巡業に出る他はない。八月の盆前は各地に田舎芝居の稽古の振付という仕事があるが、その他の場合にはたいていは悲惨である。ちなみに

田舎芝居は村々の御願(おがん)所の杜に仮舞台をしつらえ、カンテラの灯で野天に催される。巡業の劇団が演ずる場合には仮小屋を建てる。もし田舎巡業で相当資金を得ると、彼等は直ちに中央に帰って劇場を乗取らなければならない。農村不振の時は阪神に出かけることさえある。これは同地方に出稼ぎの女工たちの懐を覗うのである。こうして阪神の場末を巡って、また琉球に帰ってくる。彼等が京阪の劇場を見学するのはこの時だけである。

天川踊（儀保松男君）

俳優は一座に大抵一五、六人、全部男俳である。もっとも変態的に女優を一座することもある。かつて稀代の淫婦とうたわれたかの本荘幽蘭が、伊良波一行に加わっていたことがあったという。俳優になるものは俳優や座方のものの子弟が多い。十四、五年前、中学卒業生が四、五名劇場に投じて、新劇運動を興したことがあったが、これは永つづきしなかった。現在の俳優中には名優といわれるほどのものがいない。

今は隠退している玉城盛重氏は琉球最後の名優といわれている。しかし前記儀保君のごときは、若い美貌の女形として評判がある。私は現代歌舞伎界に、この種の女形らしき女形がいるか否かを疑いたいと思

った。彼が扮する古風な若衆姿を見て、私は若衆歌舞伎に対する慶長人士の熱情を想像したほどである。

大正八年頃までの好況時代には、役者すなわち興業主である彼等の収入は非常に良かった。或るものは家作を買って、時人を驚かした。しかし今の不況時代に入って、すべての俳優はその日暮しの有様、以前買った家も今は抵当に入っているという次第で、転業するものも続出した。が世人は俳優を賤む風があるので、転業して成功した者は数えるほどもない。好況時代には風紀も悪かったが、その日暮しの今日の有様では、彼等は一般に神妙である。多くは内職もしないらしい。中に遊女の手踊を指南するものがある。儀保君のように人気ある立女形で、妻子を養って日給一円ないし二円だという。ただし晩飯だけは劇団より出る。私は彼等が楽屋で自炊した飯を幕間幕間に食べているのを見た。パトロンなどももちろんいない。第一、上流のものは芝居を見ないということである。

このような有様であるから、若い俳優はすべて前途に望みを抱くことができない。儀保君は捕手の一人になってもいいから京阪の撮影所に入りたいという希望を洩らした。自然技芸に身を入れるものも少なく、劇団自身道具衣裳に金をかけることもできない。私は楽屋を訪問して、その小道具などの粗末なのに驚いた。「ヤッツケ」が多いのである。稽古もたちまわりを一、二度やるくらいのものである。科白ももとより台本がないのであるからかなり自由である。

これらの点は内地の田舎巡業芝居と全く同様であって、とくに問題とすべきものではないかも知れない。組踊のごとき古典は、俳優以外に素人の好事者がいて相当保護されている。近来世人の興味がこれに向ったから、急に亡び去ることもないと思える。第一俳優は組踊の本格の型をかえって知らぬということである。そのため、民衆がこれに飽いて、悉く活動写真に向ったら、琉球の民衆劇は少なくとも都会においては、早晩滅亡すべき運命にあると言わなければならない。ただこれが内地の田舎芝居と異なる点は、その

舞台の地方色である。これはいかに筋があやしげであり、道具がチャチであり、演出がヤッツケであっても蔽うことができない。また、それだけに様式化されていない利益もある。私のような他県人にとってははなはだ興味がある。同県人にしても、市に古代博物館、風俗館のような設備のない限り、また、面倒な文献に拠らない限りは、過去の琉球を知る唯一の機関であろう。歌舞伎劇がなかったとしたら、われわれは「チョン髷」の概念を得るために、今頃は文献を繰っているかも知れない。鉢巻を戴き、芭蕉布を纏い、前帯、日傘で歩む姿は、舞台以外には現今の沖縄では見られない。私は単にこの利益のための多大の犠牲を払って、沖縄の劇団を保護せよとはいわないが、識者がこのような利益をも考えて、現今の沖縄劇団の改良に努力されたらよかろうと思う。私の考えを述べるならば、俳優は内地と同様、真正の意味の新劇の方に精進して、現代の観衆を繋ぎ、一方、一種の古典として時代劇を整理し、あるいは改作して存続させるのが唯一の方法ではなかろうか。それも琉球語そのものを後世劇場のみで聞けるという——あたかも江戸時代の言葉を歌舞伎劇のみでわれわれが聞き得るように——事情になれば、これは後世への何よりの功績であろうと思う。ただし今のままではこれははなはだ望みが少ない。世人は私が沖縄劇に興味を持つことをさえ不思議としている。琉球のベデカーともいうべき県教育会刊行の「琉球」には、歌舞音楽を紹介しつつ、那覇市の劇場の存在に一行だも触れていない。沖縄の劇場は世人から今やほとんど完全に見離されているのである。

15　黒田氏訪問

一月六日。昨夜の夜ふかしに思わず朝寝をして、起きると十時に近い。日曜日のこととて、今日も官庁

に用を弁ずることができない。そこで午前中は天草丸の阪本氏より紹介状を貰っていた、波上の陶師黒田理平庵氏を訪ねることにした。理平庵氏は折悪しく不在とあって、その家兄が出られた。私は同氏の好意により、黒田氏蒐集の琉球古陶、古漆器、古染織物等を一覧することができて多大の利益を得た。古琉球の工芸品については、近年伊東忠太博士や鎌倉芳太郎氏の努力によって、絵画、彫刻、建築等とともに始めて世間に紹介され、その価値が明らかにされた。鎌倉氏（「啓明会第十五回講演集」大正十四年）によると、まず琉球陶器に釉薬の用いられたのは、元和三年以後のことである。最初は薩摩の朝鮮陶工によって伝えられたが、のち直接にも朝鮮陶法は伝えられ、寛文の頃よりは中国の陶法も移され、また後に薩摩の陶法も入って来た。つまり琉球古陶はこんな短期間に、複雑な影響をうけて発達して来たのであるが、明治年間にはすでに衰亡の期に入って、今日の不振状態に陥った。今黒田氏が琉球で蒐集した古陶を見ると、琉球製品中、以上の影響の歴然と指摘できるものがあるばかりでなく、中国、朝鮮、薩摩等、国外製品もあり、南島往時の国際関係を如実に見る感じがした。

琉球漆器の歴史は陶器よりも古く、明の宣徳以前に溯ることができるという。これには堆錦、および貝摺が特に面白く、他にいう沈金、蒔絵、箔絵等がある。意匠はおおむね琉球独特の画風を示し、一種不思議の美を有している。漆器上に用いられた金具は、私には珍らしく、おそらく中国風であるかと思われた。

古琉球の染織物中で、いわゆる「紅型（びんがた）」は最も有名であり、かつ美しい。これはわが友禅に似た染物であるが、友禅よりは歴史も古く、ナイーブである。色は燕脂が特に美しい。織物にも種々あるが「花織り」「手縞」等、縞の中に絣を混えたものははなはだ美しい。黒田氏は「琉球人は絣を織ることの名人である」といわれたが、私もまたそう感じた。今日琉球に多く遺残するかの中国製緞子等の絢爛たるのに対して、以上の琉球産染織物が、謙譲な工芸美を発揮しているのは、はなはだ快く思われる。正午黒田氏邸を

辞す。

16　県立図書館

午後は沖縄県立図書館を訪う。かねて伊波氏等より紹介状を得ていたので、館長真境名安興氏に名刺を通じる。氏は初代館長伊波氏の後を承けて篤学の士であり、かつ温厚の長者である。私たちを益すところの多いかの『沖縄一千年史』は氏の著作であり、私がこの日初めてその存在を知り、そして直ちに入会した南島研究会は、氏を中心として活躍しているのである。私は氏によって、私の渡琉の目的である人骨採集の上に多大の便宜を得たのみならず、その他種々の点においてはなはだしく利益を蒙ったことを特記しなければならない。

沖縄図書館に、多くの貴重なる琉球史料を収蔵整理していることはつとに有名であるが、短時日の滞琉中に、その一々を借覧することは到底不可能である。多くの訪問者はおそらく同様の事情を嘆くであろう。この点において、南島研究会がまず、『中山世鑑』、『球陽』、『遺老伝説』、『東汀随筆』のごときものから、続々印行を企て、南島研究誌上にすでにその一部を実行されたのは、はなはだ感謝すべきことである。

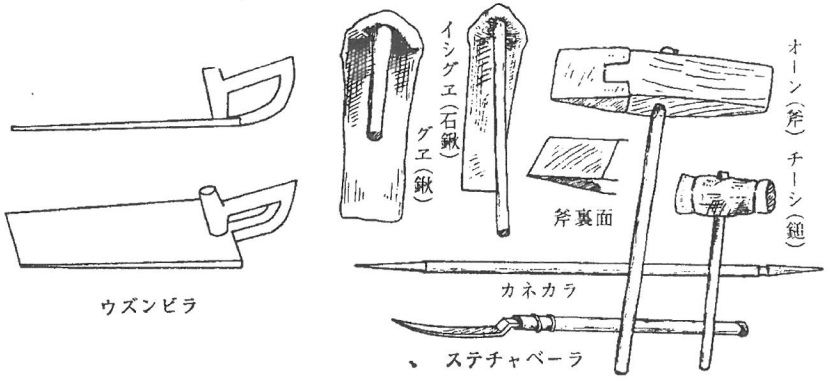
沖縄図書館には、なお多少の考古学的遺物をも蔵している。石器時代遺物としては、伊波、荻堂、城嶽等の貝塚出土土器片、獣骨等があるが、土器片には紋様のあるものが遺っていない。石器も良品は殆どない。ただ久米島久志川発見の磨製石斧が一個ある。宮古島発見といわれる勾玉があるが、石器時代のものか否かは不明である。なお土器には八重山の古陶にて「離焼」と称するものがある。赤色素焼の壺であるが、かなりの高熱を通ったと見えて、所々に偶然に銀釉が現われている。その状はちょうど蝸牛の這った跡のようであるから、世人は粘土に蝸牛を混じて焼いたものだと伝えている。他に那覇港口の海底より得た高麗焼の陶器が数点ある。

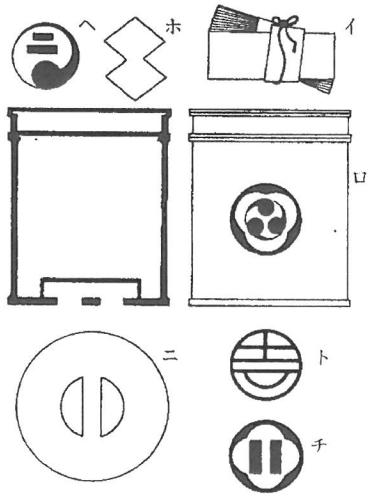
土俗品で珍らしいのは木製農具の「うずんびら」である。これは「手鋤」ともいうべきものであって、すでに柳田国男氏の『海南小記』にも所載のものであるが、鉄器の輸入以前における南島の農具の有様を偲ばせるものである。直径約二五センチ、胴高約一〇センチくらいの太鼓がある。表面には稚拙な獣が描いてある。これは往時の婦人が旅行の際に叩きながら歩いたものだという。

風俗上の遺品としては芭蕉布製の官衣など数点を見たが、特に珍らしいのは「帕（はちまき）」すなわち官帽である。これは官位によって形も多少違い色も異なる。紫黄は貴く、紅緑はこれにつぎ、青は最も賤しい。同色のものも、なおその間に差別があり、高貴なものはいわゆる浮織冠で、綸子に種々浮紋を織り出したものを用いる。もちろんこれに併用する簪にも、位階による差別がある。帯袍は言うまでもない。ちなみに帕は鉢巻で、古くは布を頭に巻きつけたものであるという。国王は「皮辨服（うまんとん）・冠（たまんちゃーぶい）」を用いる。昭和四年四月、第一回名宝展に、尚家より出陳された皮辨冠は、金鉢巻に宝玉を無数に嵌め、龍頭の大金簪を挿して絢爛豪華眼を奪うものがあった。皮辨服、犀角白玉帯と称する袞衣、石帯もその折に観た。話がそれたが、沖縄図書館には、この帕を納めるための数個の帕箱が遺っている。内外とも黒、赤等の漆を塗り、表面に家紋を描いている。多く金蒔絵である。

琉球史上の遺物としては、福州琉球館の門扉に掲げられた「柔遠駅」とある扁額や、那覇港口、迎恩亭上に掲げられた「迎恩」の二字額、その他見るべきものが多いが、すべて割愛する。同館所蔵の美術品等については、後述の機会を作ることにしよう。

四時、図書館を辞して外に出ると、館前に数人の土工が土を起している、彼等の工具を見ると、私たち





（イ）…帕
（ロ）…帕　箱
（ハ）…同断面
（ニ）…同底面
（ホ）～（チ）…紋章

が日常見るものと少なからず違っているようである。試みにその名を尋ねながらスケッチをした。

これより久米町の聖廟を見物しながら、古本を漁り、絵葉書を買うなどして、折からの微雨の中を宿に帰った。

夜は再び観劇、今夜は東町の「球陽劇」というのに行く。この劇場のことは既述した。この夜は数番の舞踊と歌劇「松の精」、史劇「今帰仁由来記」等を見た。劇中八橋流の琴を弾く件があったり、敵役がハブにうたれて苦しむところがあったりして面白く見物した。宿に帰れば十二時。さて明朝からはいよいよ仕事を始めるのだと心を励まして床についた。

17　奇　遇

明くれば一月七日。七種粥を祝う日であるが、旅にしあればそのこともなく、尋常の朝餉をとっていると、今しもこの宿に到着した客の一行が、中庭を隔てた広間で、声高に話すのが聞こえる。聴くともなく聞えてくるその話中に、「墓」「人骨」「運天港」などという単語がしばしば出てくるに至って、私はたちまちに極度の緊張を味わったのである。彼らもまた私と同一目的を以って渡琉した人々ではあるまいか。疑心暗鬼とやら、私はこの想像が確定的なように感じて醜くも狼狽した。やむを得ぬ事情の下にあったとはいえ、鹿児島での二日、那覇到着後の二日を、無為に過した事実が、私を一種の神経衰弱症に陥れていたのであろう。私はその一行が私にとっての競争者のように感じたので、先んずれば人を制す、一分でも早く官庁の手続を終ろうと、朝食もそこそこに、支度を整えて玄関に出る。と、同時にそのひとびとも玄関に出た。正面衝突である。一行は三人いずれも未知の人物であるが、あらゆる外観において私を威圧す

るに足る人物である。私は一足早く宿を出て腕車を県庁に走らせる。

県庁に着くと、学務課長はまだ登庁していない。しかたなく隣接する沖縄図書館に赴いて、登庁時刻を待っていると、そのうちやや冷静な気持を回復し得たのは幸いであった。同時に先刻の狼狽ぶりがはなはだ滑稽に見えて、ひとり冷汗を催した。やがて県庁より通知があって、知事官房にゆく。この頃ちょうど沖縄県知事更迭の時に当り、新知事はまだ着任していない。官房において、まず私の目に入ったのは宝来館の玄関にて見たさきの三客である。この時学務課長宿井氏は、直ちに右三氏を私に紹介せられた。貴族院議員北村氏、同じく大城氏、そしてわが京都帝国大学教授武田五一博士の三氏である。この最後の名を耳にして、私は名状すべからざる安心と嬉しさとを感じた。同博士はその名を知ること久しく、しかも未見の師であった。科を異にするとはいえ、同じ大学に在ること数年、未だかつて見ず、一朝沖縄に来て初めて拝顔するとは、実に奇遇というの他はない。

私は先刻の無礼を謝し、それぞれに来游の目的を語ることなどあって、たちまちにこの三氏に昵懇の栄を得た。そればかりではなくこの日これらの名士に陪従して、終始同一行動を採ることができたのは、私にとってはなはだ過分のことであった。聞くところによれば、武田博士は建築材料調査を兼ねての再游であり、北村氏は観光をともにせられ、県出身の大城氏はその案内役とのことである。

これよりしばらく同官房で大城氏の沖縄経済談を聴く。かねてきいてはいたが、いま大城氏が数字をもって手際よく説明されるのを聞くと、畸形的沖縄経済の内情が始めて明確に判る。生産過少と輸入過多は本県経済難の根本原因である。しかもこの過少な生産額の一割以上は交通費に割かれる。談話のいちいちをここに述べ尽すことは不可能であるが、私の職掌から特に記憶に残っているのは、沖縄五三町村中、医師のない村二二、産婆のいない村二四という事実である。もって本県の保健状態を察することもできよう。

右の談話をきいている間に諸般の手続も終ったので、一行は県立図書館に向い、転じて県工業指導所に向う。同所は近年の創設ではあるが、陶業、染織、漆工等の工芸について、秩序よく研究を進めている。ことに新進の所員諸氏が、古代琉球工芸の復興を目指して努力されるのは非常に喜ばしいことである。私たちの参観時、漆工部においては、ちょうど御大礼記念として同県より奉献する、見事な螺鈿大屏風を謹製中であった。本指導所にも、二、三の琉球石器を蔵しているが、記録が不備である。

同所を辞し、大城氏の招待によって昼食をとるため風月楼に向う。時は正午を過ぎてすでに久しい。

18 首里

風月楼は那覇江の中島にある奥武山の西端、もと御物城（ものがすく）といい、藩倉の跡にある。波上の見晴亭とともに、那覇における他県風料亭の随一である。北明治橋を渡ってこれに近づけば、石門は厳として、あたかも城郭に入るようである。楼上の眺望は広く、遥かに那覇港口を望んで、船舶の去来を指呼することができる。

食後少憩の暇もなく、県庁差しまわしの自動車に乗って首里に向う。私は今日公的な手続も終えたので、直ちに目的の行動に移るべきはずであったが、私が第一に訪れたいと望んでいる運天港へは、明朝、武田博士一行が往訪の予定なので、これと行をともにするのが便利であろうと勧められるままに、この日も残る半日を、首里観光に従うこととしたのである。

那覇より首里までは、自動車で僅か十分内外の道程である。首里に近い山坂を上ると四囲の風景はとみに美しく、古都に向う情緒は早くも湧いて来る。午後二時半、首里に入る。

首里は古来中山の都、しかし今見るような形をとったのは、有名な尚真王以来のことである。すなわち

わが足利時代の末に当る。一歩市中に入れば四百数十年の寂びは、随所に漂うのを感じる。竜潭を右に世持橋を渡ると、左側に古い大邸宅がある。尚侯爵邸である。車を停めて表門を入る。表門は石牆より内方に袴腰の形に凹み、門の東方には牆上に物見台のような建物が聳えている。細砂を踏んで玄関に向う。ここより侯爵家の家令、百名朝敏氏の案内で広間に通る。広間は書院作りで床間あり、障子は板戸。すべてお手のものの屋久杉をふんだんに使用してある。この室で茶菓を饗応される。菓子は侯爵家特製の雞卵糕とかいうもの、カステラと味付パンの中間のようなもので、落花生の実が入る。少憩の後、邸内を巡覧する。庭園は純和風とも見えない。灯籠、手水鉢等の石造物はみな面白く、それよりもさらに面白いのは庭内の植物である。一月七日というのに、まさに百花繚爛の趣がある。蘭に水仙、堇に薔薇に花芭蕉。かずらの類の紅い花はことに美しい。玄関に還る。玄関脇の後架の窓に、貝を薄く摺ってステンドグラスのように嵌めたのがある。これを透って入る光は、えもいわれぬ和らかさである。貝は南洋よりの輸入品。仕事はやはり貝摺奉行の手に成ったものであろう。

侯爵邸を辞して円覚寺に赴く。寺は尚真王が明応元年の建立したもので、総門、放生池、山門、仏殿、最後に竜淵殿と、一直線上に配列し、左右に鐘楼、鼓閣等があり、禅刹特有のプランである。塔頭を有せず、規模は大とはいえないが、なお琉球第一の巨刹である。開山は芥隠禅師。

一行は北脇門より入る。この簡素な石門ははなはだ美しい。本殿、山門等の木造物はいずれも中国風で、みな優秀である。柱脚、勾欄等の石造物の意匠もまたはなはだ振い、琉球独特の美を発揮している。

殊に放生池上に架せられた石矼が傑作である。仏殿は釈迦を本尊とする。作は脇侍文殊普賢ともに大傑作ではない。ただ須彌壇背後の壁画は面白く、彩色はやや新しくて後世の補修を経たと思われるが、画風はやはり琉球独特のものである。金剛会を描いたものだという。おそらく琉球唯一の大作品であろう。

円覚寺を辞す。去り難い気持である。寺の西方、円鑑池中弁才天堂および有名な観蓮橋の石欄を見て、「たまおどん」に向う。尚家歴代の墳塋である。円覚寺南方の森の下道を踏んでこれに詣れば、石墻いたずらに高く、内景は拝すべくもない。しかし四囲の空気は自ら厳粛で、一行思わず襟を正す。陵前に額づき香を薫じ供米を捧げて、何事かを祈念する老婆がある。琉球社寺、御願所には付きものの情景である。これより首里城趾に向う。

首里城は天孫氏以来の居城であるという。しかし現存の遺構は多く尚真王以後のものである。建造物では正門の観会門（文明九年）などが最も古く、これと同時に建てられた正殿、所謂百浦添（むだすい）は後世再度の炎上を重ねて、享保十四年復旧、弘化三年の修営を経ている。まず観会門に向う。石造拱門の上に入母屋造りの楼を立てている。門前の石獅は非常に面白い。門を入って数十歩内で壁瑞泉門に達する。門の畔に瑞泉あり、石製竜吐より清冷の水は滾々と湧出する。歴代冊封使はこれに題して石碑を刻んでいる。うちに、「中山第一」とあるのは徐葆光の書である。石竜の彫刻もまた面白い。

これより漏刻門を経て城内に入る。城内はやや荒涼の感がある。瓦片を拾いなどしながら、正殿に向う。正殿は往時国王執政のところで、外観重層、正面に唐破風を有し、棟の両端、破風の突端に異様の物を置く。高さ五四尺、巍々として聳え、琉球第一の巨殿である。壇に石欄を付し、石階の左右に見事な竜柱を樹てている。石欄の彫刻もこれと同規で、ともに尚真王が創建時代の遺構であることを示す。

この正殿は先年維持費の関係より廃棄の運命にあったのを、伊東博士等の尽力により、新設沖縄神社の拝殿という名目の下に、政府の特別保護を蒙ることとなったのである。武田博士は同保存会委員の一人とし、種々調査する所があった。私はその間に友人服部勝吉君に贈ろうと、新古数種の古瓦片を採集した。

興は尽きぬが、時も移ったので、城を出でて大手通りを西に行くと、右手に園比屋武嶽の神厳な森を拝

す。これに崇美な石門があり、前に石炉を安置する。もと王家の花樹園で、門内の古碑に宣徳二年の銘文を見る。これによるとその頃よりすでに霊験著しい拝所であったと言う。

これより有名な守礼門を望む。これは今廃滅した中山門の第一坊門に対して第二坊門をなし、嘉靖年間の建造で、もと丹塗りであったことは、これを「上陵門」と称したことより察せられる。形はなはだ優美、楼上「守礼之邦」の四大字を書いた扁額を掲げてある。

守礼門をくぐり、かつては貴紳上薦が往来した綾門大路に、今は人影もない寂しさを味わいつつ、車を走らせて町家の間に入り、直ちに帰路につく。

19 歓迎会

宝来館に帰着。夕食後大城氏来訪、那覇市官民有志者は今夕、武田博士一行のために歓迎会を催すから陪従せよとの勧誘。これに従ってまず大正劇場に車を走らせる。

二階正面に特別に座席を設けてある。着座すると直ちに開幕。二才踊、姉小舞（あんぐわーもい）の後、今夕は特に組踊「執心鐘入」を演ずる。これは玉城朝薫が道成寺より編曲したもので、「琉球道成寺」ともいうべきものである。舞台は紅白のだんだら幕。囃方は舞台裏。

旅僧の代りに中城若松という少年、これは儀保君、金武ぶしにて花道より出る。本舞台にかかり「わぬや中城若松とやゆる……」以下の詞となる。ちなみにこの若衆役は、女役と同様の節まわしである。髷も女髷に似ているが釵は上より挿す。両脚の踏み開きは、立役と女役との中間の程度である。女あるじは玉城君。紙燭をもって上手より出る。いずれも扮装は「冠船踊」の原本に指定したのより簡略であるのは致

し方もない。以下型のごとくあって、座主、小僧大勢出で、若松の鐘入となり、女役鬼面撞木を持って狂いとなる筋は、ほとんど道成寺伝説通り。ただし日高川の条はない。詳細は伊波氏の近刊『琉球戯曲集』を見られたい。

次にあやぐ踊、天川踊の二番があって、劇場を出る。宴席は菱富楼。直ちに酒宴に入って、芸妓どもの手踊りを見る。御前風、同上かぎやて風上り口説、四ツ竹節、万歳踊、鳩間節、花風節の七番、それぞれに面白く、酒は琉球特有の泡盛、冷徹水晶を溶かし、試みに口に含めば舌上を転ぶがごとき気もちがする。食物の豚料理もはなはだ珍らしく、中華料理のように濃厚なところはやはり、琉球独特である。十二時、宴を終って宝来館に帰る。

20 山原（やんばる）へ

一月八日。快晴。八時、県庁の自動車がくる。この日は学務課長福井氏の案内で、島北国頭（くにがみ）地方、俗に山原（やんばる）を訪問する日である。武田博士、北村氏、福井氏、いづれも痩躯とはいえないひとびとである。私もまたこの点においては諸氏に譲らない。さすがの県第一等車もためにやや窮屈の恨みはあるが、途上の風景と車中の談話の面白さに、私は旅行中初めての幸福感を味わったのである。

不思議なのはこの国の自然である。左手に見える海の色も夢のようだが、道の両側には木瓜の花が咲いている。と思えば昼顔が咲いている。釣鐘草がある。女郎花がゆらいでいる。畠はと見れば豌豆、蚕豆、薯の花の咲いているのもあり、甘蔗の穂のすでに白く穂波するところもある。苗代の水田があるかと思えば、麦の穂ののびた所もある。桑の巨木も珍らしいが、われわれが蔬菜のように思っている唐辛子は、こ

こでは潅木である。見はるかす山松も、見馴れた松の姿ではない。熱帯植物の珍らしさはもちろんのことである。悠々と魚をあさる鳥の姿も好い。

さらに面白いのは街道に沿って散在する農家である。棟の短い四注の藁屋根、正方形に近いプランは、鹿児島地方の農家に似ている。壁は竹を網代に組むものが多く、土塊、石塊を重ねたものもある。農家の広庭に小さい馬を使って甘蔗を絞る風景、聚落に入ればほとんど毎日、軒先に豆腐を売ろうと思い思いの小箱を立て並べたのも面白い。一度ならず裸体の子供達が、田川に水遊びするのを見ては、われわれはただ呆れるばかりである。

浦添の城趾は右手の松林に遙かにそれと知り、為朝が船出したと伝える牧港を左に見、北谷も過ぎると嘉手納に着く。那覇より嘉手納までは軽便鉄道が通じている。「ここを過ぎて鉄路を見ず、始めて辺境に在るを覚える」という福井氏に答えて、私が「またこの軌道を見て始めて田舎に来たことを知る」といったのは車中の失笑を買った。こうして読谷山喜納の番所を過ぎると、やがて国頭郡に入る。これより四囲の風光は頓に一変した感じがし、山容渓声はようやく幽邃を加えて来る。植物も変り民屋も異なる。われわれはたちまちに山原にあることを知ったのである。

十時半、恩納に着いて小憩をとる。恩納とは面白い地名である。沖縄初代の知事、奈良原男爵はこの地名を詠んで「国頭の蛸で名高いおんなかな」とやらかした。その名物の蛸は味わうよしもなかったが、茶店に蜜柑などをとって喉を湿す。恩納の詩人ナベが

恩納岳あがた里が生れ島、森も押しのけて此方なさな

と歌った恩納岳のかなた、わが想う人の生れ里。この山を押しのけて此方にしたいとは、人麻呂の「靡けこの山」よりもさらに強い。

恩納を出で、喜瀬や許田の浦々の飽かぬ景色を讃えながら、正午名護の町に入る。名護は山原第一の要津で、かなりの殷盛を示している。

浦々の深さ、名護浦の深さ、名護の美少女の想ひ深さ

という小唄は、すぐ好きになれる。山原男は向う息が荒いと聞くが、女は情が深いというのだ。街ゆく男女の顔かたちも、首里や那覇の人とは多少違ってくる。

一心館という他県人経営の旅宿に入り、那覇より携行の簡単な昼食をとる。一心館の構えは田舎町の商人宿の程度である。しかし非常に清潔、かつサービスがいい。上は知事に至るまで、山原訪問の名士は皆ここに泊るという。

食後名護の郊外に出る。午後に入って天気はますます良好である。まず海浜に出て舟を見たり、農家に入って家内を見廻す無遠慮を演じたりする。豚小屋兼厠の構造を見ようと、鼻をつまみながら恐る恐るそれに近づけば、見慣れぬ客の訪問に豚公は驚いて、今にも脚下の黄金泥を跳ねかけようとする。名護郊外には有名な穀倉が数個所にある。皆いわゆるたかくらの類で、その構造はしばしば紹介されているが、見る目にはなはだ愉快である。彼らはこれを単に「くら」という。下に入り人の通うべき足場を見る。試みに懐中電燈を把って中に入れば、鐘乳洞特有の冷気の肌に泌みるのを覚える。遺物らしいものもなく、これを出で百按司墓に向う。

百按司墓は丘陵の南面、運天村の背後にかかる懸崖の中腹にある。幣原坦氏の『南島沿革史論』以来、天下に広く知られた遺跡である。前面は樹に蔽われて、今は南の日ざしを遮られ、樹間まばらに、港湾の光るのを見るばかりであるが、すでに二時、再び車中に帰って運天に向う。

21 運天

運天は為朝上陸の地と伝える所、今も山原の良港の一つである。名護より北方三里の山道を走ると、渓流に衣を洗う山原乙女の姿は見えないが、美しい唱声は樹蔭より洩れ聞える。仲宗根の里を過ぎると、数分で運天に着く。村の入口で自動車を乗り捨て、蘇鉄畠の中の小径を踏んで、村後の丘陵に上る。数百尺で眺望たちまちに開け、屋我地、古宇利の近島はもとより、雲烟遙かに辺戸岬のかすむのを見る。天下の絶景である。ここに数株の巨松をめぐらして、為朝上陸の紀念碑があるのも一つの愛嬌である。それより少し下ると為朝の窟がある。この窟は自然の石灰洞で、入口は種々の植物に蔽われているがかなり広い。洞底は斜下しているが、地上は明るい陽を受けて、住居としても絶好の場所であったと思われる。ここに私が数えて西より順に、第一号より第一〇号の石灰洞がある。洞の多くは人工が加わり、第四、第五、第六、第十洞は、ほぼ自然に近い。その天井には巨大な鐘乳が垂下している。第四、第五、第六の三洞は、その前面に石墻を作り、漆喰で固めてある。高さ約七尺。第一号、第二号、第三号および第九号は、入口に木造の梁柱および障板を遺し、いわゆる「板門」をなしている。第二号、第三号はほぼ完全である。第七号にも僅かにその跡を示す梁が遺っている。第一号洞には板門の前に、第四、第五号には石墻の内部に、山原竹を編みなした網代の壁が一部分残り、いずれの洞も砂礫を下に敷いてある。

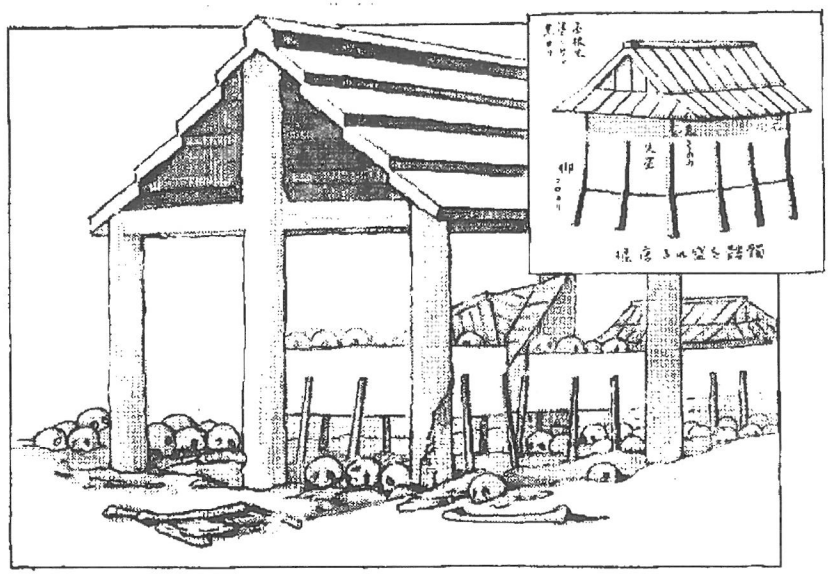
第一号洞の内部には、木造の切妻屋形をした唐櫃様の棺が四個、多くは大破して、不規則に置かれてあり、棺の内外には人骨破片が散在している。人骨は外観古くかつ重い。色は蒼寂び、質は固いが表面は風化している。

第二号洞は、第三号洞の西上方にあり、足場がなくて、精査することができない。

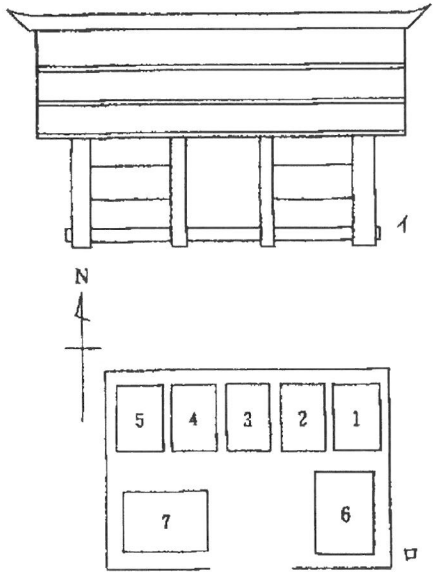
第三号洞は内部に屋形石棺、屋形陶棺、壺形甕棺の数個、やや不規則に置かれている。その周囲に僅少の骨片を見るが、概して清潔である。試みに甕棺の蓋をとると、洗葬された人骨がほぼ完全に残っている。底に水の溜っているのもあり、骨質ははなはだ脆弱で、触れるとこわれそうである。石棺内の人骨はさらに脆弱である。ジモン（Edmund Simon）博士の "Riukiu, ein Spiegel für Altjapan" 1914 の第十図は、この第二号および第三号洞を示したものである。

第四号洞は七尺の石墻を越えて、木造屋形様の屋根が見えている。ジモン博士の第九図はこの屋根板の一部分である。屋根板を掲げて内部を覗くと、白骨累々として充満している。その多くは完全骨で、その上一見はなはだ質が良い。本洞の内部の状態については、後章において詳述するつもりである。

第五号洞の内部は白砂を見るばかりで、第六号洞は石墻の内部が広く、全洞中第一である。ここに木造屋根の形は残っているが、柱はみな倒れて惨憺たる木塚がある。菊池幽芳氏が『琉球と為朝』の口絵に掲げたものはおそらくこれと思われる。すなわち明治四十年頃より後に、このように倒壊したものであろう。その下には、入母屋形の屋根をした唐櫃様木棺の破片があり、破片には黒漆、赤漆で唐草模様を描いたのもある。人骨は長骨破片等が散乱しているが、菊池氏の写生のような充満ぶりではない。それはその後に散逸したか、改葬されたかであろう。この洞の奥に上段の間のごとき場所があり、ここに辛うじて破損を免れた木棺一個が安置されている。その形は菊池氏写生のものと同形である。ただし、「えさしきや」の文字は燈火を近づけても既に見るべくもない。前に香を焚いてこれを崇めるもののあった趾がある。この洞の奥壁になお一小洞あり、あたかも竈のようになっているが、その入口は石で塞がれている。この洞の天井鐘乳は美しい。



運天港のどくろ塚（上は立石鉄臣氏による復元図，下は同側面・平面図）



第七号、第八号洞とも入口は積石あり、漆喰は用いていない。前者は入口狭く、上に一本の木梁を横たえて板門の名残りを示している。内部には人骨破片散乱し、悪童どもがこれに投石してことさらに破壊した痕がある。第八号洞もほぼ同様である。両洞ともに骨質は第一号洞のものと似ている。

第九洞は板門破れて、内部の状態が明らかに見える。中には石棺、陶棺、甕棺充満し、その間の空所には、長骨を重ねて美しく積み並べてある。甕棺の丸形の蓋をとって内面を見ると、多く雍正、道光の頃の年号刀口を記し、付近の村名、人名が記されている。一壺に二体分入れるのもある。頭蓋は常に上部に、足趾骨は底部にある。石製屋形棺のあるものは、底に長骨数個を平行に敷きならべ、その上に頭骨を二個あるいは三個、規則正しく並べたものがある。本洞の人骨は形はほぼ完全に近いが、質は最も劣悪である。

屋形棺は美しく、数種類あることを知った。石棺で四注形の屋根を有し、極めて単純なものがある。洞中最古形かとの印象を受ける。さらにその壁面屋背面に蔓模様等の線刻のあるものもある。鴟尾の形面白く、奇獣を現わしたものもある。陶棺に至っては、いずれも装飾は大いにすぐれ、みな通気窓を正面に有し、その左右に仏像を浮彫したものなどがある。甕棺はこれよりも新しく、様式は再び簡単となっている。これにも通気孔がある。ただし屋形陶棺、壺形甕棺ともにその系統を今に伝え、那覇市中はもちろん、田舎の小村にも、店先にこれら両形陶棺を並べて売るものをしばしば見る。現今のものはいずれも手法繁雑で、琉球特有のコバルト色の釉をかけたものである。

第一〇号洞はほとんど洞とは名づけ得ない岩屋であって、人工の痕は僅かに底面の礫を敷いたくらいのもの。その上に僅かに長骨が散乱している。骨の質は第一、第七、八号洞と同様である。本洞より東にはもはや何らの足場もなく、人の通った跡も見えない。

以上一〇号洞はことごとく南面し、前面の木立を透して落ちる眩らな日光は、石壇に板門に、美しく揺

れ動いている。

私は後日これらの人骨を徹底的に採集しようと覚悟を定め、この日はこの好機会を利用して、でき得るだけ完全なるものをまず持ち帰ろうと、失礼にも武田博士を助手と頼み、数個の頭蓋を第四号洞より取り出し、羊齒の葉などでこれを包み、大風呂敷で自動車まで運んだ。北村貴族院議員に「一つあればいいではないか」と、嫌な顔をされたのは恐縮であった。

これより直ちに名護に帰り、再び一心館に寄って私の荷物の一部分を、他日訪問の日までと、これに托し、さらに車上の人となって一路那覇に向う。私は山原に止って独り採集を続行する利益を知っていたが、学務課長福井氏は、一応県警察部の諒解を得、その応援を待つのがよいと説かれたので、これに従ったのである。牧港は暮色のうちに過ぎ、夕景の那覇に入る。

夜は市中の古物屋で古漆器、織物などを少しばかり買う。この古物商は昼間琉球絣を頭にのせて宿館に訪れた老婆の家である。純然たる素人屋で、押入の中よりさまざまのものを取り出して見せる。無口ではあるが巧みにお世辞をいうから油断はならない。私は後で多少高買いをしたと悔んだことであった。

22 雑事

一月九日。武田博士一行はこの日与那原方面へ視察に出向かれる。私は運天港百按司墓遺骨採集に関して警察部の許可を得るため、午前中に県庁に出頭した。まず産業課長井田憲次氏に面会し、諸般の斡旋を依頼する。井田氏は考古学的趣味ある少壮の上司であって、特に私の面接を望まれたのである。私が同氏によって本旅行中多大の便宜を得たことは、今後の記事に詳記するつもりである。同氏の紹介により、私

は警察部長関壮二氏の出庁を待つ間に、同課在勤の大城氏および衛生課の中村渠氏について、墓地や葬風のことなどを訊ねた。大城氏は運天村付近の出身で、同地方には百按司墓の他に「やまとちぶる」という墓地が仲宗根村にあり、これには明治三十五年頃までは、人骨が沢山遺っていたという。この「やまとちぶる」とは大和頭のことであり、慶長十四年の「琉球入」の際における、島津藩の戦死者の墓であると信じられていたそうである。これは必ずしも信ずる必要のないことは、沖縄における自然的墓地が一般に「大和墓」「平家墓」等、彼らより見たる異分子の墓として信じられている事実、そして、この俗信の多く不当である事実（伊波普猷氏、『古琉球』土塊石片録）から想像ができる。

中村渠氏は久志の出身者であって、先はどから紹介された久高島海岸洞窟の風葬のことなどを尋ねた。両氏はともに種々興味ある事実を語られたが、必要な話は今後おりに従って引用することにしよう。

とこうするうちに、正午近く警察部長関氏が登庁されたので、諸般の手続はたちまちに終り、同氏は食堂に私を誘って昼食をともにしながら、またもや種々興味ある話をされた。うち、大正十四年行われたという宮古島の私刑の話などは特に印象が深いが、その内容を詳記する暇のないのは残念である。

午後は沖縄図書館を訪れ、島袋源一郎氏著『沖縄県国頭郡史』、幣原坦氏著『南島沿革史論』等を借覧した。運天村百按司墓についての記載、あるいは同一地方一般の葬制等を知って、私の仕事に対する予備知識を得るためである。これらの有益な著書の記事については、後に引用するものが多い。

真境名館長によって、前掲『冠船踊』上下二巻の複写本（原本尚家所蔵）を示されたのもこの日である。これは伊波氏の『琉球戯曲集』の凡例にいわゆる「小祿本」に当るものらしく、同治六年丁卯、躍奉行の小祿按司等によって、その前年の仲秋、冊封使接待のために宮廷で演ぜられた組踊の次第を記されたものである。これより約三〇年前編曲の、伊波氏が底本とした『羽地本』は何かの理由で借覧することができ

なかったが、しばらくの間これを拾い読みして、その内容の面白さに、私は恍惚の思いをした。

それより談は現代沖縄劇場のことにおよび、真境名館長は特にこの方面の事情に明るい、那覇市役所の上間政敏氏を招いて、私の質問に答えさせられた。その談の大要は、前数章に録載した通りである。同氏はさらにこの夜大正劇場の実地に、私を案内することを約束して辞去せられ、私もまた私の気紛れの興味が意外なひとびとの時間を割き、また割くような手筈になったことに恐縮しながら、図書館を辞して帰路についた。

帰路は上之蔵町の写真屋を軒ごとに訪問して、新古の写真を蒐集する。うち、某店頭に、数人の制服を着た生徒が、教師とともに卓上に顕微鏡、頭蓋骨等を載せて、研究しているさまを撮影したものがあった。入ってその校名を問うと、首里の県立師範学校であるという。私はその人骨を借用するため、翌日早速同校を訪問しようと、即座に決心した。次日の運天再訪の予定をこのように咄嗟に変更させたのは、他にも理由があったが、この意外の掘り出し物に、心が昏んだためでもあったかもしれぬ。思えば笑止な話である。

夜は上間氏同道、大正劇場に赴く。組踊「東辺名の夜討」というのを見る。これは先夜の「執心鐘入」と異なって、やや写実的な演出である。閉幕後、楽屋を訪ねて、俳優諸氏に紹介され、かつその生活の一端を目のあたり見学する。観客席より見て、地方色の濃い衣裳、道具と思ったものが、中には本格ではない間に合せものに過ぎなかったことも、ここで知った。閉場後、若い俳優儀保君等と深更まで酒亭に相語った想出は今も懐しい。

23　首里の人骨

一月十日。晴。午前中県庁に出頭、学務課よりの紹介を得て、首里に赴き、沖縄師範を訪う。途中で武田商会の三宅氏に再会し、また直ちに別れた。師範学校では、博物課の小椋教師等の案内で人骨その他を観る。人骨は完全な頭蓋六個、長骨その他若干、いずれも質良好で十分計測に堪える。出所も骨面の落描きにてほぼ明白である。その多くは生徒が運天港その他より採集して来たものである。中に出所不明なものがある。沖縄県立第一中学校より受けついだ標本であるという。

博物教師は同校長の了解を得て、これらの貴重な標本を私の研究に快く提供された。私は欣喜して感謝の言葉も知らぬほどである。同校標本室には、松村質文氏等採集の伊波貝塚出土の石器九点、土器二一点（うち有文一二点）骨牙器五点、その他八重山郡石垣村出土の貝器等雑品九点があった。伊波貝塚の石器、土器等は大山公爵報告のものと大差なく、骨器の一つは骨錐と思われる。八重山の貝器は長一・五・六センチ、幅四・二センチ、厚三・三センチ牙形に研ぎ上げた大形のもので、用途不明である。他に卒業生の寄付による南洋ジャワ方面の土俗品等があり、沖縄現時の交通の一斑を示すものである。

これより県立第一中学校にゆく。一部の標本の出所を質し、かつ一中所蔵の標本借覧のためである。校長本荘光敬氏、博物学教師久場長文氏に面談、師範学校人骨の出所に関する記録はないが、他県より購入あるいは搬入したものではないという。当校にも博物標本として頭蓋骨一個、大腿骨、その他数個の短骨あり、記録によれば、宮古島出身の県議員立津春方氏が、同島で採集したものであるという。京大所蔵の他県人骨と交換の条件にてこれも貰い受けることにする。本荘校長はこのような好意を示されたばかりで

なく、私の琉球人研究に多大の興味を寄せられ、他日の手足掌蹠紋理の採集に際しては、同校生徒を提供しようと約された。

首里における意外の収穫に勇躍しつつ帰途につく。那覇に帰れば夕景に近い。西武門（にしんじょう）の大城という活版所で、『琉球俗謡』『組踊』、『琉歌集』『琉球伝説』等を購めて宿に帰る。この『組踊』は現今劇場等で臨時行われる組踊の底本となっているのであって、前日借覧の小祿本に比して、さらに数段詞章が卑俗であるらしい。八八、八六調の琉歌も珍らしくて面白い。しかし難解である。

この夜は県学務課長福井氏の斡旋で、折から滞琉中の山内陸軍中将一行に、武田博士一行およびわれわれを加えて、宝来館の晩餐席上、近時流行の座談会が始まった。中将一行は築城法研究のため、中城城址の視察を目的とする来遊である。専門上種々興味ある談があったが、いずれも翌日の仕事を控えていることでもあり、深更にわたって飲みかつ談ずるには到らなかった。

24　再び山原へ

一月十一日。晴。武田博士等はこの日帰途につき、私は再び運天訪問の予定である。別れに際し同博士は私に磁石、バロメーター、自動シャッター等の機械を貸与され、私の行を激励された。感謝惜別の情は尽きないが、出立の時間も来たので、車上の人となる。時に午前八時。この朝の同乗者は紺絣の琉衣を纏う老婆一人、老齢のために下顎低く、顴骨は強くその顔は四辺形に近い。眼はなお明眸を失わず、眉宇の間に一つの決意が漂っている。これは琉球老婦人独特の風貌である。試みに「どこへ」と訊ねると「山原へ」と答えて他を言わない。

車外の風景は三日前と異ならないが、しかも新しい人影のない海岸の、静かな太古のような眺めはことに嬉しい。

朝波はうごきはおれど白とりは　いさりはすれどねむるこの磯（牧湊付近）

郵便車を兼ねていると見えて、嘉手納に着くと、車は郵便局前に停る。用の済むのを待つ間にスケッチをした。車は土砂運搬用の古いトラック、これに甘蔗を満載し、夫は上に乗って馬を駆り、妻は後に立つ。琉球風景につきものの一つである。正午前、名護（なご）着。一心館に入る。

昼食後、名護小学校に校長島袋源一郎氏を訪う。前記『国頭郡史』の著者である。その顔貌は山原人士を代表しているようで、私の記憶に強く印せられた。これについては後に詳記するつもりである。同氏は私のために、琉球研究に関する文献目録、琉球葬制に関する諸記録等を用意して教示されたのちに私を導いて運天に同行された。

途中、仲宗根村巡査駐在所より、応援かつ監視役として巡査一人同乗、直ちに百按司墓に向う。まず百按司墓の実地について島袋氏の説明を聞いたが、私の先日見た第九、第一〇号洞は、同氏はこの日初見とのことであった。これより巡査、運転手、島袋氏を助手と頼み、第一号洞より始めて、人骨の採集に着手する。骨は新聞紙に包み、番号を記し、名護より用意して来た大風呂敷に包む。その日は時間の都合で、第一号、第六号、第七号、第八号洞および第四号洞の一部分に限り、他は明日の仕事にのこした。しかも完全で良質の頭蓋一五個、頭蓋破片十数個、躯幹四肢骨多数を得た。うち個体所属の判明したものは第四号洞の一部のものに限り、他はおおむね不明である。第四号洞その他については、なお詳記を要する点が多々あるので、百按司墓に関する一般事項とともに、次節に再説することにする。

こうして作り上げた大風呂敷包み数個、これを山から運び下すのが大変であった。中には文字通りの骨

折り騒ぎもある。それを自動車に満載して名護に帰り、夕食後、古箱古新聞紙を買わせて、荷作りに取りかかる。一切自分一人の仕事だから苦しい。十二時近くまでに大荷物六箱釘づけにする。

25　百按司墓（ももじやな）

一月十二日。この朝は都合よく名護より運天行のバスが出る。相客は一人、これは仲宗根で下りる。私は仲宗根駐在所で準備を整え、人夫の雇入方を依頼して運天に向う。村口に車を捨て、トランクを肩に、単身百按司墓に登れば、朝暉鳥囀は樹間に揺蕩し、山気はなはだ爽かである。人夫が来るまでの小閑を写真撮影に費す。

やがて人夫が来る。続いて仲宗根駐在所巡査も来る。作業が始まる。人夫は在郷軍人とて、はなはだ使いやすい。ただし人骨に対しては、本地方人特有の嫌悪を示し、直接これに触れることを肯わない。ために肝心の採集は私が独りこれに当り、彼は私が包裝した人骨を受取り、これを運搬するに過ぎない。これは私の労力の負担を増し、採集時間の不足を結果することとなった。一々の人骨について、詳細な採集記録を作ることができなかったのは、この事情によるのである。

まず第四号洞より始める。これは既述のように見える石墻をもって三面を囲まれ、中に家屋形木槨がある。石墻上より僅かに見えるのは、この木槨の棟木の一端である。屋の構造は菊池氏挿図（既出）の木槨とほぼ同様であるが、それが六脚であるのに対し、これは四脚で、東西北の三壁は板を張りめぐらし、正面は中央に入口を有している。木槨の長さ約七尺五寸、幅五尺、高さ五尺五寸、入口の高さ二尺六寸、幅二尺である。内部には多数の木棺破片散乱し、無数の人骨が堆積している。木棺の配置、構造を見ると、

原配置を保っているものは、七個であるらしい。この配置は島袋氏の『国頭郡史』の四三一ページの挿図に比較すれば、本地方一般の配置に近く、またもし例の世代順位を応用して解釈すれば、一より七に至る番号の順序に世代が下るはずである。ただし、この解釈は本木槨内の人骨が、各世代ごとに埋葬された同一族のセリーと受取れぬ点があるので保留する。ただ木棺の構造は一より五に至るものは、形式は同じく切妻屋形式であるが材料は繊細で、大きさもやや小（一尺七寸×一尺三寸）、表面赤漆あるいは黒漆で唐草等の模様を有し、腐朽の程度もはなはだしく、人骨も木槨中最悪であるのに反し、六号および七号棺は、材料強固で塗料なく形も大（二尺三寸×一尺五寸）、その形あるいは第一号洞の木棺に酷似している。中に納めた人骨もやや良質で、明らかに一―五号棺のものよりは新しい。また第一号より五号に至るものは形式はやや異なるが、その材料手法模様等は、第六号洞内に散乱する唐櫃様の入母屋形木棺とよく似ている。

以上七個の木棺の他に、木槨内にはさらに多数の木棺がある。これらは槨内の空所に不規則に横たわっているばかりでなく、他の木棺の上に不遠慮に積み重ねられ、その配置は乱雑で、その多くは入口よりせず、明らかに屋上より投下したものである。棺はすべて長方形の蜜柑箱のようなもので、何の装飾もない普通品、中に納められた人骨は全百按司墓中では最良質に属する。中には最近の晒骨に係わるらしいもあり、少なくとも石墻形成後に、本槨内に埋葬されたことは明らかである。ところがこれらの石墻の設けられたのは明治十五年である。これは風通しを妨げて、木造物や人骨の腐朽を早める結果に終ったが、伝来の墓所をもたない貧民が、これを乗り越えて、中の木槨を利用することを妨げなかったものであろう。

つまり木槨内には、最近に至るまでの同地方人の骨がある。これはほぼ疑いない事実であると信じる。そうすれば古い方はどうかというと、『球陽』巻之二尚忠王の条下には、次のように記している。

是れ出り遺族（尚忠王の）の徒、皆な遁れて隠る。即今の今帰仁・問切下・運天村の所謂百按司の墓なる者は、其の遺族の墓也、墓内に枯骨甚だ多し、又た木龕数箇有り、以て屍骨を蔵す。修飾尤も美にして、皆な銘は巴字金紋。而して一個の稍や新しき者の壁に、字有りて弘治十三年九月某日と云う。此れを以て之を考うるに、則ち其の遺族は尚真王時代に至りて、老いて尽きしなり。此れ其の証也。然れども人没し世は遠く、墓地の骨露わる、今人之を問えば、則ち運天村の人曰く、裔孫已に絶え、掃祭する者有る無しと。

これを見ると、百按司墓は文明元年の頃、今帰仁に隠遁した北山王族の墓地であり、『球陽』編纂の頃にはすでに裔孫絶えて、掃祭者もない有様であった。そしてその頃すでに有紋の優美な木龕あり、そのやや新しいものに「弘治十三年」の銘があったという。この木龕は現在の唐櫃様木棺に当るであろうし、これらが弘治十三年以前の造営になることは確かであろう。そして幣原氏の前出著書によれば、同氏はこのような鎧櫃形一木篋の壁に、「ゑさらきやのあし」なる仮名文字を読んだという。この「ゑさらきやのあし」は、後菊池氏が「ゑさしのあし」と読んだように、「ゑさしきやのあし」の誤りで、『国頭郡史』の著者によれば「伊差川の按司」であろうという。伊差川は運天に隣接した羽地間切の一地名として今も残っているから、百按司墓の最古骨が、四百数十年前の同地方人骨であることは確かといってよい。

島袋氏が最近発見した古記録によれば、沖縄各地に散在した北山王族の末裔六五人が、三万貫文を投じて百按司墓を修営したのが、万暦五年九月である。つまり各洞の板門、木槨はこの際に成ったものである。そして第一号洞木棺および本木槨中の第六第七の両木棺は、その手法材料等より見て、おそらくその際、同時に成ったものと見られるから、本木槨中には、弘治以前より万暦の頃、並びに明治以後最近に至るまでの人骨が、共存するものと見なければならない。

槨内の人骨の間に埋没して、こんな考えに首をひねりつつ作業を続けていると、非常な渇きと空腹とを覚えた。洞を出ると正午である。人夫を麓の人家に遣って飲料を求めさせると、しばらくしてビールを一本買って来た。私は必ずしも酒類が好きではないが、この時のビール一杯は実に珍味であった。名護より持参の弁当をひらき、ビール一本に三人の喉を湿しつつ昼食も終ったので、小憩の後また作業にかかる。第四号洞を終れば、爾余の洞にはあまり良質の骨はない。それでもできる限りの材料を集めて、五時にひとまず、百按司墓を採集し尽くした。折よく迎えの自動車の着いた知らせがあったので、山を下って一同仲宗根に向った。駐在所で作業衣を解き、荷作りなどをして名護に向う。七時名護着。夜は十一時迄荷作り。昨夜のと合せて十二箱、さすがに疲労を覚えて夜は熟睡した。

（付）昨十一月号記事に、百按司墓の紹介は幣原氏の『南島沿革史論』以来のこととしていたが、笹森儀助翁はこれに先立つ数年、明治二十六年九月、既にこの地を訪れ、「番所の南百按司山に百按司墓を参拝す。数年前石垣へ塁塗にて堅め外部より頭れたる数百の髑髏を蔽えり。行を同じうして数間を隔てて人民の墓地点在す。およそ七八ケ所、幾百の人骨あるを知らず。」との簡単なる記事を『南島探検』中にのこしている。よって前説を訂正する。

26　山原別離

一月十三日。午前中は人骨の発送その他の雑事に終る。昼食後、那覇行バスの発する一時半までの間に、島袋氏邸を訪れて謝礼を述べた。日当りよい前庭に、ゼラニウムその他の花は紅紫とりどりに咲き誇っている。同家を辞し市中の写真店で写真を漁り、名護美人の数枚を手に入れる。店頭を出ると軒先の桜花は今や蕾破れて、ちらほらと笑み出す陽気である。

時間が来たので車中の人となる。隣席に一心館の十四、五才の女中が乗っている。数日来の顔馴染である。きけば那覇の叔母の家にゆくという。この少女は国頭郡本部町出身であるが、顔つきは繊細で、身体もまた細い。しかし山原人一般はこれとはなはだしく異なっている。今手に入れた写真を見ても、そのいちじるしく突出した顴骨、張り広がった低い下顎、高からずして鼻翼の張った鼻、口裂の大きい厚い唇、濃くあい迫る眉毛、低い額、一見ヴィゴラスなる感じを受ける。これに相当して肩幅、胸広く、頸は短く、身長もまた大きくはない。以上は奄美大島人に見た特徴とはなはだしく似通っている。そして沖縄一般の体質の根底をなすものは、実にこれであるかと思える。那覇首里地方人のこれよりもやや繊細な分子に宮むのは、おそらく後来の他人種の混交の結果であろう。

車中の感興、車外の眺望は飽くこともないが、私は昨今の陽気に却って風邪を引いたらしく、はなはだしい倦怠を感じ、途上しばしば故障を生ずるフォード氏に、ようやく反感を覚え始めた。四時那覇着。

夜は疲れもやや治まり、就寝前の数十分を、これも日課のようになった芝居見物に費した。この夜見たのは儀保、玉城両君の演ずる「執心鐘入」。ただし先夜の組踊と異なり、長唄風に囃方の出語りで、三弦の他に琴、太鼓等入り、衣裳、所作もはなはだしく派手であった。しかし面白味はむしろ真の組踊風演出にあるかと思われた。観客の婦女を見ると、国頭に見る所とは一見いちじるしく異なる。一般に細くて顔が長い。「那覇に帰ると顎が長くなる」と思った。

27　市中訪骨

一月十四日。好晴。午前九時、腕車を命じて住吉町、垣花小学校に向う。同校所蔵の人骨を一見するためである。一中教諭久場長文氏の談によると、同人骨は本小学校建築の際、地中より発掘されたものの一部分であるという。同校の所在は那覇市の西端に近く、小禄村鏡水に殆ど相接している。これに近づくに従って、腕車の速力はにわかに鈍る。見ると街路は柔かい砂地で、車轍は深く砂中に喰い込んでいる。

校門に着いて名刺を通ずると、校長は授業中ということで、数十分間の猶予を求められた。付近の古刹臨海寺を訪う。寺は市中民家の間にあって、規模見るべきものがない。もと同寺内にあった沖の宮は、市外真和志村に移され、今は庫裡本堂を兼ねた平凡な一宇を遺すにすぎない。古義真言宗で東寺の末。軒下に懸けられた梵鐘には古色あり「天順三年三月十五日、奉行ケ那覇、大工花城」の銘がある。住持を煩わして本尊を拝した。本尊は薬師三尊の浮彫に、石面着色、仏身および菩薩には金箔をおく。裏面に「至正壬午四月十九日云々」の銘があるという。すなわち琉球最古の彫刻物である。厨子もまた琉球独特の手法に成り、表面に仏相華の蒔絵がある。なお、扁額、聯等、見るべきものがある。住持はもと京都に遊んだ人で、語るに従って懐旧の情はその方に動いた。これを辞して再び小学校を訪う。校長は許田氏、私の来意を快く容れて、直ちに所蔵の人骨を示される。人骨は不完全頭蓋一個と、数個の躯幹および四肢骨より成る。発掘時の事情を伝える何らの記録も遺っていないが、質は比較的良好で、一見古代人骨とは思えない。同校長の好意によりこれを借用して県立病院に向う。

県立病院では、折柄診療中の副院長石川氏を煩わして、所蔵人骨の有無を訊ねる。氏は貴重の時間を割いて、所蔵標本中より数個の脊椎骨、四肢骨等を選び出されたが、これも所伝不明である。その上同病院設立当時、標本として他府県より購入したとの想像も可能なので、借用は中止する。なお石川氏は琉球古芸術品蒐集家とのことである。滞琉中に少暇を設けて、訪問することを約したが、ついにその暇を得なかったのは残念であった。

28　沖縄県庁所蔵の遺物

県立病院を辞して県学務課を訪う。中城訪問のために、公用自動車利用の許可を請う目的である。折悪しく学務部長不在で要領を得ない。昼飯までに時間ができたので、同課所蔵の遺物を一覧することにした。遺物は主として石器時代のものである。その中で石斧が多く、合計一六点、うち中頭郡では伊計島出土七点、津堅島二点、美里村伊波一点、具志川村天願貝塚一点、宜野湾村真喜志森乃山一点、国頭郡では、本部村浦崎一点、同村浜元一点久志村一点、村名不明嘉津宇一点である。右のうち伊波、天願以外の地名はすべて、「石器時代地名表」に未載である。以上の石斧はすべて磨製、森乃山の一点以外はことごとく円刃である。森乃山石斧は内の一面が他面に比して磨面広く、片刃のごとき感を与える。石器としては他に八重山の勾玉、錘石、出土地不明の凹石、津堅島および国頭郡金武の烟管がある。勾玉は碧玉質で形は単純、屈曲少なく、貫孔小、刻線なし、長さ二センチ強の小形である。錘石は扁平な分銅形で、上部に貫孔あり、同部は鈕状。烟管はいずれも石灰岩質の軟かい石で、津堅のものは火皿だけである。金武のものはいわゆる雁首で、約三・五センチの管がついている。挿込孔はいずれも円く、竹管を用いたものと想像される。他に出土地不明の土製雁首がある。形やや小さく、土器としては他に八重山川平貝塚出土の土器片がある。厚さ約〇・八センチ。固くかつ重い。表面に刷毛目のような線条があり、他に細い点線が並行に走っている。直線である。八重山の石器時代土器も地名表に未載である。地に並行直線で描いた鋸歯紋ある土器片、一個の穿孔を有し数条の並行線を刻んだ牙製装飾品、一個の穿孔を有する貝製装飾品等がある。いずれも出土地不明。古瓦数点のうち、勝連城および首里真玉城外の記載あるものは、前記浦添城の古瓦と同一手法で、他に首里城のやや新しい瓦もある。

以上を一覧し終って、県立図書館に真境名氏を訪う。

29　崎樋川遺跡

図書館で昼食をとり、これより真境名氏とともに崎樋川に向う。中途国吉真哲氏を訪うて案内を頼む。国吉氏はつとに同所より土器片、獣骨片等を発見して、これが石器時代遺跡であることを推定した最初の人である。真境名氏も同遺跡は未見なので、私の滞琉を幸いに、ともに発掘調査しようとかねて約束されていたのである。この約束の日は実は昨十三日であった。それを私は誤って本日と記憶していたために、これらの諸氏に多大の迷惑をかけたことであった。

崎樋川は那覇市の北部天久にあり、海中に突出する丘陵である。ここに清水涌出する一拝所があって、婦女の参詣するものが多い。泊の町家を離れ、畠中の小径を進んでこれに近づくと、諸所に白骨の墓が散在し、怪奇な阿旦叢とともに、晴天下はなはだ強烈な風景をなしている。丘に登れば四方は開然とひらけ、南方波上を指呼すべく、波濤は脚下の珊瑚礁に雪と砕けて、眺望絶佳である。

遺跡は南面する数丈の懸崖に臨み、ところどころ阿旦叢に蔽われている。そして懸崖面には至るところ地山をなす隆起珊瑚礁岩露出し、四所に辛うじて腐蝕土を遺す有様である。遺物層は極めて薄く、遺物は土層とともに、一程度下方に向って移動したことも想像ができる。試みに一隅を掘ると、貝塚に混じ黝赤色の小土器片、獣骨片等を得た。珊瑚礁岩より成る未製石器のようなものもある。これらは県図書館所蔵の城嶽貝塚のものと酷似している。ただし有紋土器片はまだ見出されない。これを石器時代遺跡と認める

のは穏当である。ただ遺物層は右のように極めて薄く、到底有望な遺跡とは認め難い。ことに私の目的とした人骨を得られる予想は殆ど不可能である。

少時の試掘の後、阿旦に包まれた拝所を見て丘を下る。帰途、小橋川朝重氏に会う。

30　城嶽貝塚人骨

小橋川氏は考古趣味を有する篤志家である。私は先日真境名氏より、城嶽貝塚人骨の存在について聞くところがあったが、その発掘者は実にこの人である。紹介が終ると、私は早速その人骨について訊ね出した。同氏の談によると、大正十四年十一月の頃、雨後土中より洗い出された人骨片を、城嶽貝塚の南隅に見出した。これを掘り出すと下端の欠損した人類大腿骨である。ただしこの欠損はその発掘時に起ったものである。伴出遺物は深く探索しなかったためか、少しの貝片以外には何ら見出されなかった。同氏はこれを石器時代人骨と認めて大切に保管し、日下首里市の川平朝令氏に寄托しているという。

私はそこでその人骨を一見するため、川平氏邸を訪問したいと告げた。そこで真境名、小橋川両氏は私を真和志村の県立女子師範学校に案内して、在校中の川平氏に紹介せられた。そしてしばらくの後、われわれは首里市川平氏邸内に招かれた。

川平氏邸は首里における士族邸特有の構造と思われ、はなはだ雅味がある。問題の大腿骨は左側上半部に当り、成人の大腿骨であることは明らかである。骨体下半部は川平氏保管中に亡失され、今は同部を遺すだけで、これを見ると曝露の程度等、石器時代人骨特有の外観を有している。ことに骨体上部の扁平度の強い点などは、日本石器時代にはなはだ多い特徴であって、これが石器時代人骨であることは外見より

も想像ができる。（なお本大腿骨については、「人類学雑誌」第五〇〇号記念号に、拙文を掲げて詳細の報告をした）。

私は、これを見て始めて、城嶽貝塚の実地を踏査しあるいは発掘して、あわよくば多数の人骨を得ようとの希望を抱くに至った。これを同行の諸氏に相談すると、みな快く私の企てに賛成して、その援助を約束された。川平氏邸には本人骨の他に、同氏および小橋川氏等が蒐集した種々の遺物が蔵されている。伊計島の石斧四点は、この日県学務課で見たものと同様、磨製円刃、伊波貝塚の石斧は打製で、珊瑚礁岩より成り、あるいは未製品とも思われる。浦添城趾の古瓦は円形の瓦当で、蓮弁と思われる浮彫を有している。彫ははなはだ深い。他に久米島「いしきなふわ按司」の墓より得た木枕あり、刳抜き折りたたみ式で、明らかに中国式のものである。

夕方首里を辞して宿に帰る。夜は絵葉書を書いて知友に贈る。

31　首里の採訪

一月十五日。午前十時、首里。昨夜大腿骨とともに借用して那覇に持ち帰った浦添城の古瓦を返しに、川平氏邸に立寄る。十一時より第一中学校五年生の掌蹠紋を採る。助手を頼まなかったため、一人約五分の時間を要し、午後にわたって二五人分という不成績に終った。

午後二時、師範学校を再訪し、所蔵の土石器類を調査する。その概要は既述した。うち伊波貝塚出土の土器底部の破片で、底面に篭目を有するものがあった。

同校で、先日借り残した人骨数個をさらに借用し、理科教師某氏の案内で、首里第一小学校を訪問する。学校は首里城内にある。放課後なので周囲は廃墟の静けさがある。応接室で教諭、玉代勢（たまよせ）氏等に会う。同

氏等の好意で、頭骨二個を得た。一つは首里城下の洞穴中より、他は浦添村牧港の山洞前で、土中より発掘したものという。

細雨となる。同校を辞して那覇に帰る。

32　琉球古美術写真

一月十六日。女子師範学校で生徒の掌蹠紋を採集する。生徒を助手と頼み、午前午後にわたって四六人。採集中、宮古および国頭出身者は、一種の手型を有するような感じを得た。彼女等は一般に手掌広く、指長小である。京都出発前、沖縄人の体臭について、足立博士より注意があったので、採集中に鼻も大いに働かせていたが、この方は別に収穫もなかった。

帰路図書館に立寄って、鎌倉芳太郎氏撮影の琉球古美術写真数十種があるのを知る。これを借用して、先日来預けておいた書籍、人骨等とともに宿に運ぶ。夜は西本町の活動写真館をしばらく覗く。河部・大河内の「弥次喜多」というのをやっていた。九時、宿に帰って写真を見る。

琉球古絵画としては、筆者不明の歴代王像いわゆる「御後絵」や、円覚寺、天久宮、首里観音堂等の仏画の他に、著名な画家の手になるものも多い。欽可聖城間清豊自了（一六一六―一六四四）はその最たるもの。冊封使杜三策が顧愷之や王摩詰に比したというのもヨタすぎるが、狩野安信が友とせんといったくらいの値打は十分にある。自了と伝えられるものにほぼ二風ある。一つは玉城盛朝氏所蔵の高士逍遙図や、図書館所蔵の李白観瀑図のように、まず梁楷風のもの、これには落款あるいは印章がある。他は臨海寺の渡海観音や、尚順男爵家蔵の陶淵明像のような描線やや繊細のもの、いずれも伝自了である。

自了以後で見るべきものは殷元良（座間味庸昌一七一八―一七六七）であろう。遺品、屋慶名氏蔵、松下猛虎図、比嘉氏蔵山水等はいずれも佳品である。ややおくれて呉著温（屋慶名政賀一七三七―一八〇〇）、向元湖（小橋川朝安一七四八―一八四一）および毛長禧（佐渡山安健一八〇六―一八六五）がある。中でも呉著温は山水に巧みで、最も傑出している。自了以下すべて日本画の影響がむしろ大なるものあることは注意すべきである。他に画師査秉徳（上原筑登親雲上）康熙十四年の銘ある久米聖廟の壁画も注意すべきもの。ただしこれは同五十五年呉師虔というものの修飾を経ている。八重山画家大浜善繁（一七六一―一八一五）、喜友名安信（一八三一―一八九二）、山里朝次（一八四八年頃）等の板障画も面白い。

彫刻は建築物付属の石刻の他に、仏像、天尊像、古陶人像等あり、手腕は一般に絵画よりも一段優れている。

33　掌　紋

一月十七日。午前十時半、女子師範。前日同様にして、放課時までに六七人の掌蹠紋をとる。前後両回に一一二人を得たわけである。

帰路、県庁学芸課に寄る。中城への公用自動車の件は都合が悪いというので、産業課の井田氏に再交渉する。これより図書館に廻り、昨夜の写真を返納して、二、三所蔵の実物を見る。

伝自了の渡海観音像、紙本彩色。西福寺七世真意記として「此尊護道院宝物、先王様御拝領、表具簾末ニテ拙僧誓願ニヨテ於御国元再興、代々不可散者也」とある。落款印章なし。像は出面で竜魚の頭を踏む。描線繊細であるが自ら風骨あり、傑作と見える。李白観瀑には自了筆の落款があり、梁楷の風であるが家

宕の気にやや欠けるところがあって、むしろ日本画の影響が多く見える。

他に尚純王（万治三―宝永三）の真蹟一巻、古碑拓影等を見る。うち万暦四十八年の「極楽山之碑文」は漢文であるが、嘉靖元年の「真珠湊碑文」、同年「頌徳碑」は仮名文字がある。頌碑には「爰有宝、創神仙託曰、号治金丸、称真珠也」とあって、治金丸および真珠の、二宝物を頌徳したもの。この治金丸とは、尚侯爵家現存の古刀千代金丸であって、先年東京名宝展に出た逸品である。

帰宿すれば井田氏より返事あり、十九日、中城旅行と決定する。夜は早寝。

一月十八日。早朝より首里の第一中学校に行く。先日とり残した掌蹠紋を得るためである。この日は同校金城教諭等の助力を得て、放課後数十分も費し、八十人近くの採集を終る。掌蹠紋はこれで男女それぞれ百以上を得たから、ひとまず打切りとする。（なお本材料に基づいて得た成績は「人類学雑誌」第四十五巻第五付録に「琉球人手足皮膚の理紋について」と題して発表した。）連日の労働に疲れを覚えたので、早くより宿にかえる。夕食後しばらく散歩、琉球民謡レコード等少しばかりの買物をする。この日はちょうど旧暦十二月八日に当り、例の鬼餅を食べる日である。旅宿の好意により、これを見かつ味わうことができたのは幸であった。鬼餅の由来は『琉球国諸事由来記』の説話で有名である。鬼に食わせるものを紀念として人が食うのは、何国も同じことながら、ここのは説話が生々しく、多分のグロ味を有するのが面白い。私が見たのは、こば（蒲葵）の葉、あるいは「さんにんがーさ」といわれる蘭科植物（月桃）の葉で包み、蒸したもの、材料は米または黎。食べると芳香があり、笹の葉の比ではない。この日早朝、首里に向う途上、郊外より多くの女たちが、これらの葉を頭上に載せて那覇市内に入り込むのを、異様に思ったが、これであった。中頭地方では甘蔗葉を用いることもあるという。

34 中城行

一月十九日。日曜日。県産業課井田氏の案内で、中城訪問の予定日である。起きると曇っている。県庁を出たのが十一時。まず山下町に小橋川氏を誘い、引返して与那原街道に向う。同行は上記二氏の他に、中城出身の県吏喜舎場氏がいる。街道は三里の坦路、窓外は見渡す限りの甘蔗畠。正午近く与那原に着いて、産業試験所に入る。課長の出勤とあって、休日ながら所員総出の優待である。まず場内を一巡して、珍しい製糖の過程を見学し、黒砂糖の大塊や、握り太の甘蔗茎などを贈られる。これは那覇の宿舎で滞琉中絶えずしゃぶったが、遂に消滅しないので、とうとう京都まで持ち帰り、よいみやげとなった。

同所で昼食した後、再び車上の人となる。中城湾に面した島の東南岸の風景は、西岸に比してまた一種の趣がある。榕樹の大きいのも驚くが、甘蔗の大はさらに見事である。自動車は樹林の底をゆくように這い、甘蔗が尽きて海を見る。

津覇、安里を過ぎ、「島や中城花の伊舎堂」と唱われたその伊舎堂もすぎた。久場で自動車を捨てた頃には細雨となっている。これより徒歩で中城々趾に向う。甘蔗林中の小径を縫って進むと、ようやく山路にかかるという路傍の、とある一角に小岩洞があり、中に蓋の半ば破れた一個の甕棺がある。調べると若い女性骨と当歳位の小児骨とを合葬せるものである。骨質はやや脆いが、形は完全である。蓋の裏面には「道光三（1823）十一月、父比嘉」等の墨書が見える。骨を行嚢に納めて進む。その祟りであろうか、これより雨はようやく激しく、山道は滑りがちでなかなかの難路となる。

35　護佐丸の城

中城訪問は雨に祟られることが多いと見える。大正十二年夏、伊東忠太先生もここで暴風雨に襲われ、遂に山巓を極めることを中止して、「尋ねきし甲斐もあらしの中城　みずにかへるの飛んだしくじり」と負け惜み半分の狂歌を詠まれた。その時の暴風雨は、どんな罪の祟りであったかと、苦しい中にも冗談をいいながら、ひた登りにのぼる。靴は滑るだけでなく泥土が付着して次第に重くなる。と、山上より甘蔗を担った一人の姉小が降りて来る。これが可憐掬すべき鄙歌でも唱っていたら小説めいて来るのであるが、そんな呑気などころではない。一行の難渋を見かねて、すれ違いさまに無言で甘蔗を一本ずつ渡してくれる。杖にせよと言うのである。地獄で仏というが、私にはその少女が確かに菩薩の化身くらいに見えた。

これに力を得て一気に山頂に達する。雨中に中城湾を見下す眺望の使はないが、雲霧の間より立城の石塁が倏忽として眼前に現われた時には、労苦を忘れて思はず快哉を叫んだ。

城は毛国鼎護佐丸の経営による約五百年の古城である。護佐丸は、中山王の忠臣であり、奸雄阿摩和利の讒によって憤死した。年少の遺子鶴松、亀千代の二人が、万才姿に身をやつして父の仇を討つ物語は、今も琉球で熱愛されている。

城内に中城村役所がある。いかめしい石門を潜って玄関に立ち、ずぶ濡れの外套をとると、雨は下着に透っている。上に通されて濡れた衣類を乾かし、熱い茶を貰ってやっと蘇生の思いがある。村長に人骨採集の用件を語り、案内を頼む。同所に中城の古地図、護佐丸の遺品などがある。後者はもとより眉唾もの。

微雨になるを待って役所を出る。城下の岩洞に「そうしのし」と呼ぶものがある。「そうしのし」の意

味は不明であるが、中に夥しい人骨が散乱している。鳥居竜蔵氏が往年、東京帝大人類学教室に持ち帰った人骨も、ここに獲たものであるという。

洞は自然石灰洞で奥行なく、入口は広いが低い。つまり一種の岩屋をなし、入口に積石がある。これを乗り越えて中に入ると、ほとんど足の踏み場もないほどの骨。多くは破壊されている。頭蓋などは完全なものが一つもない。しかし質はみな良好で、一様に古い外観を呈し、帯緑色の重い骨である。下顎、長骨、足趾骨は完全なものが多い。運天のように生々しいものは一個もない。また洞中何ら棺槨を見ない。

めぼしい骨を悉く採集して、大風呂敷包数個を得る。これより荻堂貝塚に向う。途上路傍の小洞に、屋状石棺を納めるものが数個所ある。これを一々採集しようというと、同行者は種々の口辞を構えて、私の意を阻止しようとする。ただ一つ石蓋をとって内容を調べると、骨はほとんど腐朽して、はなはだしく悪質であった。

36　荻堂より普天間

荻堂貝塚の名は、鳥居、松村諸博士等の紹介研究によって世人に知られている。松林を後に負った山の段々畠で面積は狭く、今は貝層も失われ、土器破片すらも見難い。耕土中には雨に洗われて貝殻が白く光っているが、多くは新しい。石器等の表面採集を試みたが、これも失敗に終った。案内の老村長に別れを告げ、これより山を北に下って喜舎場に着く。久場で乗り捨てた自動車はこのところに廻されていた。人骨を載せたので乗客の頭数はとみに増した。西行さらに南行、普天間に着く。雨はようやくやみ、空気清んではなはだ爽快である。普天間には産業課所属の農業試験所があり、種々の植物を試培し、家畜を飼育

している。これも課長の出張というので、所長以下はなはだしく緊張している。ここではからずも同所々蔵の人頭骨二個を得る。これにも増して忘れ難いものは、園内試育の琉球第一等樹より、所長自ら摘んで供せられたパパヤの風味である。

門前数十歩に有名な普天間の御願所（おがんじゅ）がある。本殿は地下隧道をなす鐘乳洞中にあり、伊東博士の調査によれば、三個の陽石を神体としているという。洞中は湿潤で陰気、永く留まるに堪えない。洞の入口付近にも瓢形の太陽石がある。当願所には赤瓦切妻屋根の拝殿あり、社前には鳥居もあり、二基の石燈籠もあって、簡素ながら形が整っている参道の美しい松並木は、尚敬王の時、賢臣蔡温が栽植したもの、いわゆる「宜野湾（じのーん）松原」として有名である。宜野湾街道はこれより起って首里に通じている。われわれは嘉手納街道をとって那覇に向った。七時那覇着、雨の日曜日のサービスにと、別れに際してとくに若干の心付を握らせると、眼を円くして驚いた運転手君の淳朴は、今日の最後の収穫であった。

37　城嶽（ぐすくだけ）貝塚の試掘

一月二十日、この日も起きると曇っている。真境名、小橋川氏等と約束の城嶽貝塚試掘の日である。所定の時間に図書館へ行ったが、雨模様のためか、約束の人は誰も来ない。館員を煩わして　館長や人夫を呼んで貰う。その暇に付近の那覇警察署に出頭し、署長に置手紙で、明日の行路病者屍体発掘許可の件を依頼してくる。やがて人々も揃ったので城嶽に向う。

城嶽は県庁の東南数町、県立第二中学校の正門に面して、忽然と盛り上って来る。小丘である芝生に蔽われた小径を登ること数十歩、眼界にわかに開けて、一眸の下に那覇全市を収める。往昔尚清王が王の大

親の女を妻にしようとして、この丘上より見渡す限りの地を、引出物に与えたという伝説がある。那覇市民が勝景の一つに数えて、四時遊覧したのもこの丘である。

丘についての詳細は、大正十五年七月、同所を本式に発掘された小牧実繁氏の記事（「人類学雑誌」第四二巻第八号）があるから、これに譲ることにする。同氏の記事は本遺跡に関する唯一の学術的記述であるが、古くは鳥居博士の記載があり、松村博士、大山公爵も本遺跡出土の石鏃等について記し、ジモン博士も、また自ら同所を踏査して、石斧土器片等を得ている。まだ報告を見ないようであるが、早大西村教授も小牧氏と同時に発掘されたのである。しかし以上すべての記事を通じてみても、本遺跡発見の遺物ははなはだ少ない。これは遺物を包含する腐食土が極めて浅く、地山をなす隆起珊瑚礁が諸所に露出し、その自然的凹所に辛うじて浅い表土をのこすような状態であるためである。私はこの日多数の石器時代人骨とともに、あわよくば先日慶大橋本教授報告の明刀銭のような編年資料をも、同時に発掘しようとの意気込みであったが、丘上を一巡してこの状態を見るにおよんで、早くも大きな失望を感じた。

やがて人骨発見者小橋川氏が姿を現わす。折柄の微雨に、朝刊新聞紙の記事によって集まった弥次馬連も散去した。微雨を冒して早速作業にとりかかる。まず人骨発見の個所を見るに、ここにはもはや貝層もなく、遺物も見えない。厚さ五寸ないし一尺の黒い表土中に、極めて微量の貝介片を混ずるに過ぎない。人夫を督して試みにこの地点を掘らせて見たが、いたずらに鋤先が岩礁に当る音を聞くのみである。

これより南東十数歩の地点、橋本教授所載の明刀銭出土地と同圏内に属すと思われる個所で、真境名氏は以前に人骨らしいものを見たという。そこで見ると同所も表土は極めて浅く、鋤を入れるとすぐ地山に達する。ただ前部位よりは僅かの貝殻と、少数の土器片を見得る程度である。

人骨発掘の夢はこうして簡単に破れた。しかしなお少数の人骨片を今後採集することは、同貝塚の状態

より見て不可能とは思えない。そして、前記大腿骨や、伴出獣骨片の性質よりして、骨質はかなり良好のものが出るはずである。ただこれを得るには、現在表土の亡失に近い丘の上表よりも、むしろ斜面の下位に近い、比較的表土の厚い層を検する必要がある。しかし斜面はおおむね阿旦の密叢に蔽われ、このために発掘は極めて困難である。同丘は県保安林区域中に属しているから、近い将来に遺跡が湮滅するとは思われない。多数の遺物はなお当分、日の目を見ることがないであろう。

私は本調査のついでにさきに小牧氏が発掘された上表の南端に近い、緩斜面を、小区域試掘して、珊瑚石灰岩製石斧二個、チャート製石鏃一個、獣骨、土器片、貝殻等多数を得た。以上の作業は昼過ぎに終った。人夫に約束の賃金を与えようとすると、半日分を固辞する。図書館で昼食をとり、関係者一同に謝意を表して宿舎に帰る。昨日よりの雨中の行動に、風邪をひいたらしく身体がややだるい。

38 糸満

城嶽発掘が午前中にすんだので、午後は暇となった。雨に濡れた作業服を和服に着替えて、一旦旅宿におさまったが、この暇を利用して、かねて望みの糸満見物を果そうと、そのままぶらりと外へ出る。

糸満は那覇の南方数マイル、島尻西海岸の漁村で、種々の点で有名である。家族間に個人経済の発達していることは、ことに河上博士等によって紹介されているが、重い魚籠を頭上に載せて、数マイルの道を、軽衣裸足、早朝那覇首里に運ぶ糸満の婦女は、一般に女子の労働を珍しとはしない沖縄人とても、驚異の対象であるらしい。それ故か彼等は糸満人をある異種族のような眼をもって見ようとする。糸満すなわちイートマンという洋人名に由来する等の俗説はここより生れた。ただこのような差別の根底に、糸満人の

体格が異様であるとの理由があるのは聞き捨てにならない。私はすでに数回糸満人を観、あるいはその写真に接する機を得たが、今日はその本拠を襲ってさらに観察を深めたいと思ったのである。

那覇より糸満へは鉄道馬車あり、また軽便鉄道がある。私は時間の都合上、後者を選んで那覇を出る。車体は古い電車を改造したようなもの、速力ははなはだおそい。その上線路は東南の東風平を経由する大迂路を描いているので、ほんの数マイルと思った糸満へ、いつ着くべしとも思われない。中途那覇港湾にそそぐ国場川口に真玉橋駅というのがある。背景は蕭々たる蘆荻。蘆荻の間に憧れの眞玉橋を望見する。橋は尚貞王の時（寛永五年）、全島の人夫八万三千余人を役して竣工した石橋で、琉球第一の大橋。先に紹介した「真玉橋碑文」は守礼門の南側にある。礒の美観は伊東博士によってつぶさに賞揚されている。

四時過ぎ糸満着。和服に懐手の散歩気分で、当てもなく漫歩する。漁村とはいえ人口八〇〇〇の村で、街上何となく活気がある。会うものは多く婦女子である。顔ごとに注視しながらその印象をまとめる。皮色濃く、体格は比較的かがまり、身長やや大というような点は多少あるかも知れぬ。しかし顔貌は那覇市民に見るところと何等差異がない。糸満人がかりにイートマン氏の子孫であるならば、沖縄人は悉くそうといい得るだろう。もとよりこれはあり得ぬことである。

糸満の町では、とある泉水の傍で三、四人の小児が裸身で砂遊びをしていたのと、ある漁家の戸口で一人の若者が今や一個の刳舟を仕上げ終って、これを台より卸し満足そうに立ち上って、家に入った光景を忘れることができない。その大きさと粗末さ。材料は杉である。

帰路はこれも出発時間の都合上、鉄道馬車を選ぶ。五時三十分発、すでに夕刻で地覇を過ぎる頃は、沖つ白浪と甘蔗の穂波が、夕闇の中にただ二つ白い。馭者はマッチの用意を忘れ、しきりと探しているが見あたらない。乗客も誰一人持っていない。闇は濃くなりまさり、今は同乗者の顔さえ見わけ難い。折柄の

月の出に窓外にうす明りが漂う。小祿の駅亭に馭者は車を停めて、マッチを求め、点灯具を用意する。寒駅は宵刻すでに深夜のような静けさ、その上、馭者の動作ははなはだ緩慢である。微熱を孕む私の脳中には、日前の光景が遠い昔の物語中のできごとのように思われ、さらに郷愁に似たものを感じる。

七時那覇着。宿舎で検温すると体温三八度一分。夕食を廃し、アスピリン〇・五を服して直ちに就寝する。

39 赤面原

一月二十一日。八時起床、体温は常に近いが食欲がない。しかしこの日は行路病屍発掘の予定があるので、粥を頓んで強いて朝食をとる。

午前午後を通じ、市役所、那覇警察署、県衛生課の間を数度往復する。学術研究目的で行路病屍の発掘という先例がないので、まず法文の研究から始めなければならない。結局那覇市長の責任をもって、一定条件の下に発掘を許可される。ここに至るまでの多大の面倒を厭われなかった各当事者、並びに斡旋者小橋川氏に深謝しなければならない。この交渉の間に、市役所々蔵の伝具著温筆、首里那覇風景屏風六曲半双を見る。彩色あり、古田初三郎描く鉄道案内の鳥瞰図のような構図で、首里那覇より、遠く島尻の山々を望む。筆致温柔にて、琉球画家の手になったことは確かであろう。

さて行路病屍の埋葬地は、那覇市若狭町の北方赤面原といわれる砂浜。西方に突出する小岬は斧崎という。赤面原の墓地は珊瑚礁の海岸線から僅か数メートルしかない。砂は湿潤であって、人骨の質は掘らぬさきから思いやられる。一面の物凄い阿旦の叢の隙間に、木杭が立っているのが墓標であって、琉球人

一般の墓にしてははなはだしく異例である。同行された市の吏員は控帳を開いて、なるべく古いものより発掘させようとする。私の希望はなるべく新しいものより始めることである。とかくするうちに大雨沛然と来り、今日の予定を中止することとなった。時すでに夕景に近い。

宿に帰って直ちに入浴。浴後の小憩をとる暇もなく、南島研究会の諸氏によって催される歓迎会席上に拉致される。席は辻町山杉楼。ただしこれは純然たる料亭である。一日の奔走に病魔はすでに去ったものであろう。私は朝からの空腹にまかせて、出される佳肴を貪り食う。会員諸氏は多く教育者であるが、席上何らしかつめらしいこともなく、私のような書生を遇するに、道をもってせられたのははなはだ有難かった。隣席太田朝敷老より種々興味深い談話を聞く。中に南島の男逸女労の風習を否定することなどもある。宴酣におよんで数名の踊子現われ、かぎやで風、上り口説、四つ竹踊、万歳踊、鳩間節、浜千鳥節、天川の七曲を演ず。散会十二時。

一月二十二日。早朝より弁当、飲料、新聞紙、ビール箱等を用意して発掘所に向う。現場で昨日約束した人夫に会う。やがて市役所上林氏、小橋川氏等が来る。午前中四体、午後五体その他頭蓋一個を得る。

砂を掘ること約一尺で木棺の蓋に掘当る。木棺の形は皆同じで、長さ約四尺、幅約二尺、底は舟底となり、ちょうど切妻形家屋を顚倒したようなものである。蓋は多く崩れ落ちて、棺は半ば湿潤な砂に埋れている。すなわち人骨はこの砂中にあり、仰臥屈葬位をとる。もちろん洗骨されていない。第一号ないし第六号は骨質脆弱、第七号以下は良好である。ただし第八、九両号は比較的新しく、軟部および衣服の一部は尚完全に消解していない。眼鏡、櫛、鏡、食器、煙管等伴葬物のあるのは、琉球では普通に見ない。第六号は犬骨一体分を合葬している。九体のうち第二、第三号は奄美大島人、頭蓋一個は伊平屋島人である。

木棺に身を容れて砂中の人骨を掘り出すのは案外手間がかかる。夕刻までに一〇体という数は、この事

情によるものである。今一つはこれ以上の発掘は許されそうもない。それで発掘を打切って荷造りにかかる。日は暮れてひとびとは帰り、私は物凄い海岸に独りとり残されて作業をつづける。月が昇ってあたりの景色はさらに凄愴となる。荷造は漸く終ったが、頼んでおいた車が来ない。と阿旦の中の小径を人がうごめいている。散歩中の中学生である。これに携帯物等の見張りを頼んで、車をさがしに町に出る。漸くにして荷車を一台雇い、再び現場へ引返す。中学生は荷積を手伝い車の後押までしてくれる。月はますます冴えてあたりは深夜のようである。夜は宿舎で、これまでの採集人骨を荷造りする。ビール箱十個。

40 瀬長島

一月二十三日。快晴、朝、西武門の山城婦人科医を訪ねる。種々雑談の後、所蔵人骨数点を借用する。同医師の談によれば、沖縄婦人の初潮平均は十六歳位、妊娠数多く、難産は少ない。自然助産で、前陣痛期より産婦は垂れた紐に縋り、雇われた力男が後より抱く。家族は酒宴を設け大騒擾を演じて悪霊を逐うという。

なお同氏の談により、島尻瀬長島の自然洞に人骨多数あり、その瀬長島は那覇の南方約一里、干潮時には舟を要せず、人力車で徒渉し得るとのことに、私は早速渡島の意を決して宿に帰る。聞けば干潮は正午時より始まるという。そこで車を雇い瀬長に向う。

この日は快晴で、車上の揺られ心地ははなはだよい。花垣を過ぎて小祿に入る。路傍の民家の軒下に陽石と思われるものがある。奇抜なのはその面に後刻と見える目鼻を刻し、全貌猿面のごとき観を呈することである。小祿の小丘を越えて緩やかな斜面を下ると赤嶺。瀬長は目前に横たわっている。幾度か甘蔗を運搬する小馬とすれ違って海浜に出る。しばらく干潮の砂上を行き、やがて轍は水中に没する。車上より

水中を見ると砂紋の起伏より、右往左往する魚類にいたるまで、歴然と透視することができる。水は深くとも膝を越えることがない。島に達するまで数町の水中車行は、はなはだ愉快な経験であった。

島は西北より東南方に長い小珊瑚礁島で、南に高く北に低い。北方に村落があり、甘蔗、蘇鉄等を植えている。往時の瀬長按司の居城あり、『琉球国旧記』によると、その夫人は傾国の美人であった。大城按司はこれを垣間見て横恋慕し、計を設けて遂に犯した。瀬長の按司はこれを知って精兵を発し、大城按司を殺した。那覇若狭町の威部竈はその墓という。瀬長の城趾は今は遺っていない。島には有名な陽石があり、子宝を祈願するために遠近の婦女はこれに詣る。いわゆる「瀬長まいり」である。

島の北方に着いて村婦に岩窟の場所を問う。南方の山腹であるという。車夫と二人で南方の山腹を蘇鉄を押し分けて、ここかしこと探し歩いたが見つからない。再び村落に引返して、先の村婦に案内を頼む。彼女は裸足で砂礫雑草の中を巧みに歩き、島の南端のとある一角にわれわれを導く。これは山麓で殆ど海浜に近く、自然のトンネルとなった岩洞で、長さ数間、両方の入口は石を築いて墨壁をなしている。高さ約六尺、これを越えて中に入ると、床は砂礫よりなり、多数の人骨が散乱している。破損は比較的多いが、質は良好である。最近のものと思われるものはない。これを一通り採集して二個の大風呂敷包を作る。岩洞の外周にも三、四の頭蓋を得た。うち二個は甕棺中に葬られ、質は比較的不良である。棺蓋に記名がない。かなりの収穫があったので、潮の満ち来ぬ間をと、急いで島を離れ、またもや水中を行く。午後一時。気がゆるむとようやく空腹を覚える。小祿の駅亭に車を停めて、駄菓子等を求め車夫と二人で食う。家の裏にパパヤ樹あり、家人に乞うて一果を得た。はなはだ美味である。家の中に少女がいて機を織る。話しかけてみるが、彼女等は一般に内気であって顔をあげない。家人の拝する仏壇らしいものがある。請うてその本尊を観ると、一見中国画と思われる関帝像である。

不満足ながら昼食らしいものも終ったので、再び車上の人となる。那覇着二時。

午後の残りを波上の散策に費す。まず天尊廟に天尊を拝し、廟前に「景泰七年丙子九月」の銘ある鐘を見て護国寺にゆく。ここにも同じく景泰七年の鏡がある。本堂の正面の「大福聚海」の横額は冊封使周煌の筆。周煌は有名な『使琉球記』の著者、乾隆の人である。これより波上宮に行く。このたびは宮司僥平名氏に請うて宝物を観覧する。謙徳三年の銘ある国宝朝鮮鐘はつとに有名である。ここに見落すことのできないものは砂岩製の太陽石である。高さ約一尺七寸、製作はなはだ巧みである。他に刀剣数振があり、中に永正祐定が一振ある。

宿に帰って瀬長島人骨を荷作りする。ビール箱二個。夜は二中教師渡口氏来訪。雑談して辞去された。

41　琉球を去る

一月二十四日。いよいよ出発の日が来た。滞琉二〇日、去り難い気持ちである。まだ見ぬところも多い。北山城趾、南山城趾、浦添も見たい。つい手近の識名園もついに見なかった。離島や先島の淳朴さはどうであろうか。慾をいえば限りがない。これらは次の訪問の時の楽しみに残しておくことである。思いなしか天候が悪い。最後の朝を首里のあの閑寂な城趾の散歩に費そうと、早朝より首里に行く。円覚寺を出て竜潭の傍を歩む頃、蕭々として細雨となった。城廓内をそこかしことさまよい歩き、園比屋武御獄を拝し守礼門をくぐり、そのかみの綾の大路を名残惜しみつつ下る。

那覇に帰って直ちに図書館に行く。最後の一時間を運天中城、瀬長等の文献調べに費し、真境名館長に別れを告げて宿にかえる。帰途土産物、古本等を購う。

昼食後は荷作り。パパヤ、泡盛等の荷がかさ張る。三時、宝来館を辞して埠頭に向う。雨中の桟橋には見送り人が多い。私の見送り人もこの中にいる。野田署長、福井学務部長、小橋川、真境名、志喜屋、渡口の諸氏である。私はこれらのひとびとに訣別して、台南丸船上の人となる。

四時、船は桟橋を離れる。見送りの人々はあらん限りの力で手巾を振り、船を追って叫び走る。岬端三重城にも領巾振る人がある。船上の人もこれに答えて、喧騒いわん方ない。しかし決して不快ではない。甲板上二、三歳の小児が、陸上の母を求めて「あんまーあんまー」と号泣するには涙を催した。

阿児奈波や那覇の湊をさりかねて　領布ふるひとにわれもまじりき

船上、花城代議士に紹介される。往年の総選挙当時、ある事情から有名となった人物である。船中多くはこの人と語る。夜船室に独座すると、どこからとなく蛇皮線の音が聞える。

一月二十五日。曇り。起きて甲板に登ると大島が右舷に見えている。十一時名瀬入港。上陸して少時散歩し、蜜柑朱欒などを買う。船室に帰ると、大島婦人の絣を押売するものに捕われる。遂に買わず。一時抜錨。七島を左舷に見て進む。小説を読み、日記を誌す。船中やや退屈を感じる。

一月二十六日。七時起床。天際に何物をも見ない。船は黒潮に乗っているらしい。午後五時、土佐の山影を左舷に見る。「定西法師物語」を読む。夜十時、室戸崎を過ぎる。

一月二十七日。六時、甲板に出る。まだ暗い。左方に淡路島の漁火が夢のように美しい。朝食の頃神戸入港。那覇を出る時丸々と肥っていた甲板の畜牛は、見る影もなく痩せ衰えている。那覇を出る時、明らかに琉球人であったひとびとは、三宮駅の人混の中では、別に特殊人ではなくなっている。私はパパヤ等の大荷物を気遣いつつ、午前十一時、無事京都駅に着いた。

冗筆と怠慢のため、だらだらと永く貴重の誌面を汚したことを編集者並びに読者諸氏に深謝します。琉球人の体質等についてとくに章を設けて述べる積りでありましたが、今はひとまず筆をおいて、他日の機会に譲ることといたします。

（付記）

この琉球旅行によって採集された琉球人骨のうち、頭骨の人類学的研究の成果は『国立台湾大学解剖学研究室論文集』第二冊、一九四八年四月、二二七―三三〇頁に、許鴻樑によって発表された。頭骨以外の人骨については未発表、全資料は今右記の研究室に保管されている。（一九七五年六月四日付記）

与論の旅

一、墓

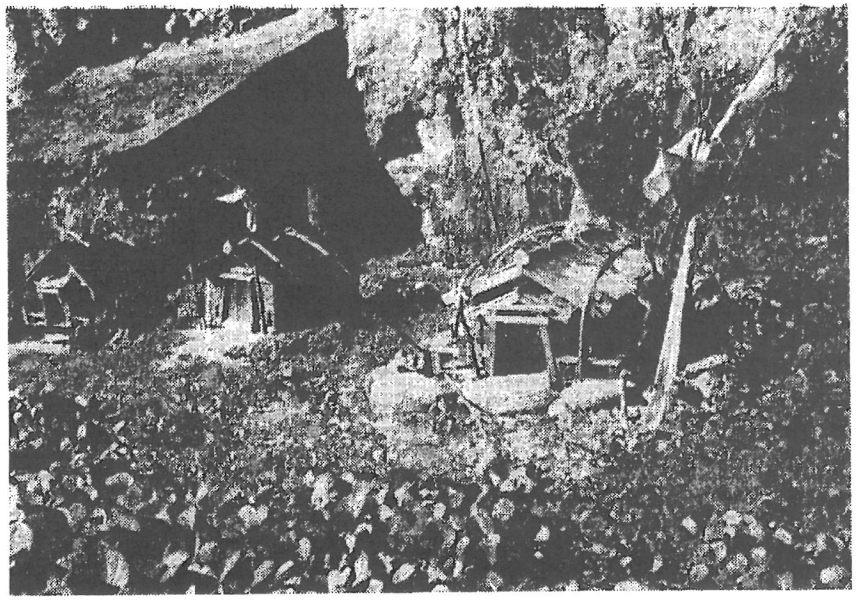
大島群島いったいに、といっても、大島と沖永良部島の一部と、与論島を見ただけだが、沖縄以南では見られない墓制がある。それはやまと風の石碑をたてることで、墓は沖縄のように家族墓でなくて、個人墓になっている。

石碑は、大島の大和浜で見たのでは、五輪塔と角塔があったが、宝篋印塔はなかった。与論島や沖永良部で見たものは、角塔のみであった。

五輪塔には安永、明和などの年号があり、角塔には、古くは宝永から、新しくは万延以後昭和に至るものがあった。五輪塔の方が必ずしも古いとはいえない。

以上の二種の他に、沖縄にも見られる、正面に仏像、蓮花などを刻み、入母屋形の屋根を蓋にした石造の家形の石櫃があった。中に納骨されており、単なる塔婆ではない。即ち骨は地表上にある。だから、石製納骨箱である点では、沖縄にも例があるが、個人墓としてこれが前掲の二種の石塔とならんで、聚落の共同墓地に、墓標の役をしているところが、沖縄とは異なっている。

沖縄では、この種のものが家族墓の中に安置されるが、洞穴の中に、他家のものと共同に置かれる場合



新墓と沖縄風の屋形墓

もある。形式からいえば、大島のこの種の石櫃の制は、沖縄風とやまと風との中間のものだが、年号を見ると、これが最も古いとはいえない。人々の好みの違いから来たのであろう。与論島のアガサ浜の墓地では、沖縄製の陶製の屋状の骨壺を、墓標に用いた一例があった。新しい壺であった。

洗骨するまでの新墓には、これも九州や四国の一部に見られるような、木造の神殿作りの「タマヤ」を建てている。与論島で見たものは、新しいタマヤを割竹をさし渡して、押えていた。これは台風に対する防護装置である。

さきの石櫃以外の墓標の下には、洗骨された骨が、沖縄製の素焼きの骨壺におさめられて埋葬されている。洗骨と石塔建立との間に時日があって、石塔は未だなく、洗骨壺の、平たい擬宝珠形のつまみのついた蓋だけが、わずかに地表に出て、墓標の代りをつとめている例がある。この時期の長い短いを見て、人々はその家の栄枯を察することが出来るという。

この木造のタマヤと同種のものを、沖縄運天港の「モモジャナ」（百按司墓）の一洞穴中で見たことがある。島袋源一郎氏が、郷土館へもっていったと聞いたが、その後どうなったか知らない。これが、同一系統のものだとすると、九州風のこうした墓制の一部は、沖縄本島、少なくとも国頭地方までは達していたといえる。与論島と運天港との間の往来はかなり頻繁であったようである。

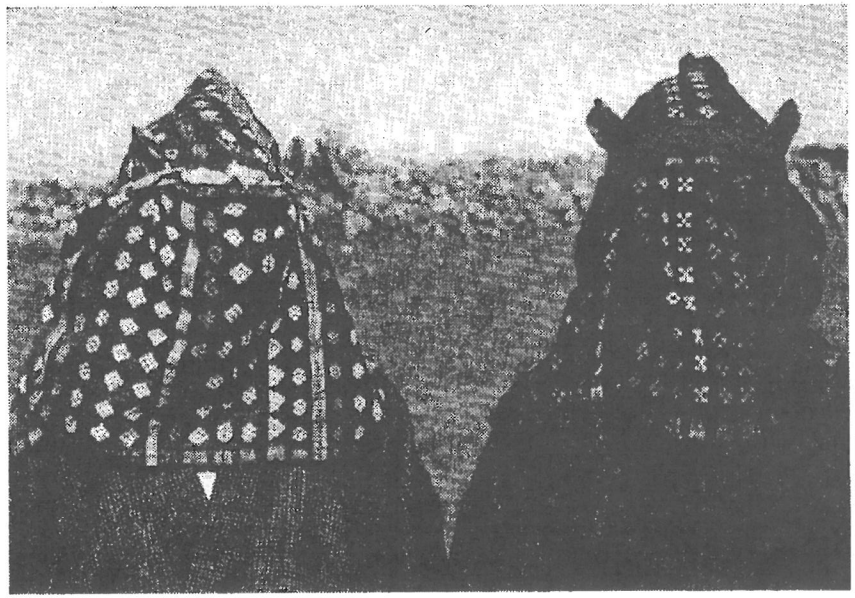
或る時期に家運が盛んになると、それまで洞窟の中に置いてあった祖先の遺骨をあつめて、沖縄風の大きい家族墓の中にとりまとめる、という例が与論島にあった。この墓には亀甲形のも屋状のもあった。即ち、この種の墓も、時代的には必ずしも古いものではない。

与論島の洞窟の中には、陶製の洗骨壺、蜜柑箱くらいのただの木箱などに納められた洗骨の他に、何らの容器の痕跡もない、むき出しの骨だけを置いてある例が――むしろこの方が――多かった。中には頭蓋だけを置いて、他の骨が全然存在しない、という例も非常に多かった。

後に、沖永良部できいた話だが、近来は洗骨の方法が略式になり、遺骸を掘り出すと、頭骨だけを洗って、それで洗骨をすます風が起こった、とのことであった。或はそんな風が、与論島にもあるかもしれない。滞在中にはこのことについて、聞くことが出来なかった。

与論島の前浜の洞窟の骨の中には、木箱などのもようから見て、比較的新しいものがたくさんあり、中には最近のものと思われるものがあった。いわゆる「風葬」というものは、決して古いもののみではないことがこれで判る。もちろん、漂流者だとか、戦死者の骨ではない。事情を知っている筈の土地の人が、みずからそういう事をいうが、他所者に話すときに、意識的にぼかして話すものと見える。

共同墓地に個人的な墓標をたてて葬ることをしないで、いまも洞穴中に、他家のものと共同に雑然と遺骨を置くのは、古来の因習にとらわれたというのでもなく、好みによるのでもなかろう。多分は、やはり



祭人の被りもののウビ

経済的の原因からであろうと思われる。台湾の漢族の場合でも、墓を作る資にめぐまれないものが、小さい岩屋などの下に、洗骨壺を安置して、永く放棄しておく例をしばしば見る。

与論島には、今は仏教の痕跡は、沖縄から仕入れた洗骨壺に蓮華の紋様などのある以外には、なにもなく、個人墓の石塔には、俗名を書いて「何某命之墓」と刻んでいる。神式であって、神殿作りのタマヤには鳥居の模型がたっている。

二、花　織

与論島の有志の人々の尽力で、旧暦八月十五日の祭事を、滞在中に挙行してもらうことが出来たのは有難かった。その祭人の被り物に「ウビ」(帯)と称する布があった。多くはこんどの祭のために急場に作られたものであったが、中に数枚の古いものが遺っており、その模様から織り方が、沖縄本島の読谷山の紋織布に少しも異ならないもので

あった。新調されたものも、手法の点では全く同様であった。

これは、沖縄では、広い意味では「花織」といわれるものの一種で、読谷山では「浮織」、八重山の与那国島では「板花」といわれている。従来はこれらの二ケ所に、この手法の遺っていることが知られていたのみで、田中俊夫氏夫妻の詳細な研究書にも、与論島以北にこれがあることは記載されていないから、これは一つの小さい発見であった。

これらの織物は、絹や、木綿や、芭蕉糸の経緯の間に、手でもって模様糸をはさみ込んでゆく手法から成り、台湾の蕃族や、さらにフィリピン以南の南方にひろがっている。田中氏は、沖縄のものは「それらの地方(南方)との関連も考えられますが、しかし、もし他からの影響があったとしても、図案等の程度であって、技術そのものは各地で自発的にうみだされていたものでしょう」といっているが、その推定の根拠は示されていない。私は、南方の紋様が、後世になって沖縄の紋様に影響したとは考え難いと思う。根本の手法と共に、古くから共通のものをもっていたであろうと考える方が、むしろ妥当ではないかと考えているが、この問題は琉球のカスリの根源と共に、なおよく考えるべきであろうと思う。

三、馬　具

奄美大島では、馬具のようすが、南九州の場合と同様であった。山形の高い鞍をつけ、木製の「おもがい」はつけていない。与論島にいって見ると、鞍は低くなり、独特の木製のおもがいをつけて、全く沖縄本島以南の、いわば琉球風であった。

ところが、沖永良部島では、この両方の風が同時に見られる。のみならず、九州風の山の高い鞍をのせ

て、沖縄風のおもがいをつけたもの、つまり両方の混合型さえあって、馬具の点では、この島が、ちょうど九州と沖縄との移行点になっていることを知った。

ついでながら、与論島には、いわゆる琉球ポニー、或は宮古馬といわれる小馬が遺っている。全島で数はほんの数頭だということであった。

四、説話

与論島でも、沖縄から大島いったいの風に変りなく、鉄製の除草用「ビラ」（篦）をつかっている。ここでは「ワクシービラ」或は「ワクビラ」という。「ワク」は除草の意味である。これに関する昔話をきいた。

ある爺さんが、畑でなにげなくビラを後ろに投げると、鳩にあたって、思わずも鳩が獲れた。家にもち帰って、今夜は鳩汁をしようということになる。と、近所の者どもが、われもわれもとお相伴にやってきて、一きれ残さず食べていってしまった。婆さん、きのどくがって、自分のポーを半分削いで、お爺さんにたべさせる。お爺さん曰く「婆さんのポーは少し臭いが、おいしいのう」。

この型の話は、他ではきかない。しかし、メラネシアにひろがっている、日本の〃カチカチ山〃の「婆汁くった」という話の類話を中に立ててみると、関連がつかなくもない。

アジニチエの伝説。「アジ」は按司だという。彼は島の軍神として、今も祀られている。攻めてきた沖縄軍をむかえて、千人を殺した。その時、血刀を洗った田を「フクミ田」といい、この田の米は神に供えることが出来ない。

千人を殺したのち、油断して、船の中にかくれていた、ただ一人の生き残りの沖縄兵に頸を刺されて死ぬ。殺した男は、ふだん勇士でもなかったので、沖縄の人々はその報告を信用しない。用心のため、更に千人の兵を用意して、与論島に向った。

与論の人々は、アジニチエの死体を生けるが如く装い、樹によって立たせておいた。その頸の創口に、ウジが涌いて、ぽろぽろとこぼれ落ちる。それを遠望した沖縄兵は、アジニチエなお生きて、白米を嚙んでいると見た。あわてふためいて逃げ出すときの騒ぎで、後の千人も自滅した。そこで、アジニチエは島の「生きて千人、死んで千人」殺しの勇将といわれる。

堀一郎教授のこんどの調査で、沖永良部島にも「白米城」の話のあることが知られた、と承った。与論のこの話も、おそらく白米城の話の、一つの変化であろう。

アジニチエの死に関しては、別の伝えがある。彼は自分の射た矢が返り来って脳天にささり、それで死んだという。足戸部落の某所には、今も頭に孔のあいたアジニチエの骨が残っているという。これは明らかに「ニムロッドの矢」の話の一つであり、東西にひろくひろがっているこの説話の分布に、一つの新しい資料を加えるものである。

五、テル

「テル」は大島の、竹製の背負篭であるが、篭のくびに外耳があり、これに通した紐の中央の、幅のやや広くなった部分を、頭に懸け、頭と背の力を同時に利用して、大島の婦人たちはものを運ぶ。この風習は世界的にひろがっているが、大島の周辺では、北はサツマの中の島、口永良部、南は沖縄の国頭地方か

ら、伊平屋島に行なわれている。奄美群島内では、本島とその附属の島々、及び徳之島にあって、沖永良部や与論には見られない。この風習の行なわれない奄美の諸地方では、沖縄の中頭以南と同様に、婦人たちは物を直接頭にのせて運んでいる。

しかし、奄美大島の本島では、荷の軽いときや、空篭のときには、婦人たちは、頭にあてる紐を胸の前に押し下げ、両手でそれをもって運ぶ。荷の重いときだけ、頭の力を借りているようである。

与論島では、婦人たちは、どんな荷物でもたくみに頭にのせて運んでいるが、或るとき、徳之島以北に見るテルと全く同じ篭で、同じ紐のついたものを、与論の婦人が用いているのを見た。しかし、紐は頭に懸けないで、胸にまわしていた。この島でも、もとはやはり、頭に懸ける風習があったのではあるまいか。

この推定に有利と思われる、いま一つの面白い資料がある。与論の茶花小学校の教場の壁に貼られていた生徒の画に、桃太郎のお婆さんと思われる人物を描いたものがあった。わきに洗濯物をかかえ、大きい桃の実を紐でからげて背負っているが、その紐をやはり頭に懸けているのである。

六、遺跡

与論島の城（グスク）のような高地では、深い汲み井戸か掘り井戸を穿つ技術が起こらない限り、人の住む聚落は出来なかった。城の部落を歩くと、畠の中から投げ出された、たくさんのシナ製の青磁片が、路上で拾われる。それは例外なしに、明代の初めのころ浙江省の竜泉で焼かれたもので、琉明貿易の始まったころに、鉄とともに豊富に輸入されたものである。この青磁とともに輸入された鉄が、岩板の掘さくの技術を可能にしたものであろうと思われる。

ところが、多くの青磁片の間に、ただ一片の石斧のかけらを、私は路上で拾った。また、城の麓さんの畠の隅で、大きい卵形の凹み石が採集されているのを見た。明初のころまでこのあたりに人が住めなかったとすると、これらの石器は、その頃までは、まだ製作使用されていたことになる。しかし、その数は少ない。

茶花区の幸名波（コウナハ）の福永さんの畑地、ここは海岸に近いところであるが、ここからは沢山の石器が発見されている。しかし、このあたりからは、シナ製の陶器は、一片も見つかっていない。後で知ったが、城の林さんという名家のお宅に所蔵されている、明らかに先史時代の石器（凹石）は、かつて、赤崎おがん附近の吉田東生さんの所有の畑の中で拾得されたのだという。これも海岸に近い。そして、私もその附近は歩いて見たが、この海岸地帯には、青磁片は少しも見られない。

つまり、これらの海岸地帯の遺跡は、純石器使用者の遺したものであり、高地のものよりは古い。琉明貿易の影響以前のものである。この地帯では、地下水の自然露頭があって、井戸を穿つ必要はなかった。そうした技術も持たなかった時代の、この島の最初の住民は、そうした場所に先ず住みついたのである。

ちょうど赤崎と城との中間で、城の方に近い、麦屋という部落がある。赤崎よりも高く、城よりは低い傾斜地である。島の人の話では、城に住みつく前には、人々は麦屋に住んでいたという。

その麦屋の部落内で、私はたくさんの石器を拾った。そして、それに混って、極く少量のシナ青磁片を拾った。たくさんの石器と少しの青磁、これはたくさんの青磁に少しの石器を伴う城の場合とは逆の現象である。つまり、明初のシナ陶器や鉄が輸入されはじめたころが、海岸から高所への居住地の移動期に当っていた、という私の推定には、非常に都合のいい発見であった。

八重山の波照間島へ昨年いったとき、ここでも海岸には純石器時代の遺跡、島の中央の高所には、たく

さんのシナ青磁に少量の石器を伴う遺跡があり、そのもようは、与論島の場合と少しも変らない。ただ、麦屋のような中間的様相を示す遺跡を、波照間ではまだつきとめていない。

シナ青磁と石斧の伴う遺跡は、沖永良部島の西原の砂丘にもあった。砂丘の中層に、表面の固くなった薄層の傾斜面があり、それより上の砂層には、江戸時代中期ころの、肥前陶器（クラワンカ手）を伴う人骨が散乱していたが、その下層には人骨も日本陶器もなく、石斧とシナ青磁片とが共存していた。ただ、そのシナ青磁は、普通に見る竜泉窯の粗陶ではなく、やや薄手のもののみであった。時代はやはり明初ころのもの、恐らくは浙江省の他の窯のものかと思われる。

青磁と石器の伴う遺跡は、沖縄本島の国頭地方にもある。いずれも琉球の離島の文化史に独特の様相であり、沖縄の国頭の如きも、陸路の交通の制限されていた時代には、やはり一つの離島に他ならなかったことが、これからでも知れるわけである。

七、石敢当

与論島の城の部落内で、石敢当を二ヶ所で見た。他にもあったと思われるが、私の見たものは、いずれもT字形の道路の角にあった。一つはつきあたりの石塀の、石組の中に組み入れられた角石にただ「石敢当」と刻まれていた。一つはつき当りではなく、T字形の路の一方の分れまたに石碑がたって、それに「石敢当」とあった。

石敢当も、もうあまり珍しい話ではなくなった。それだけに見すごされる恐れがある。分布資料は、やはり忠実に記載しておいた方がいいと思うので、見たところを記しておく。

八、芭蕉布

センイをとって芭蕉布を織る芭蕉を、与論島では「シマバシャ」といって、実を採ってたべる「ミバシャ」と区別していた。見た眼には両者の差別がつきにくい。ただ、シマバシャの方は葉柄の縁が、ミバシャのように紫色のボカシにならないで、黒い線でふちどられている。シマバシャにも実は成るが、しかし実が出来ると、糸が悪くなるという。

大島では、娘を縁づけるときに、持参金の意味で、シマバシャの山を与える。「バシャタイ（芭蕉田）」という。普通は三畝か四畝である。大島本島で醜い細君のことを「バシャヤマ」というのは、山をたくさんもってきただろう、という皮肉である。

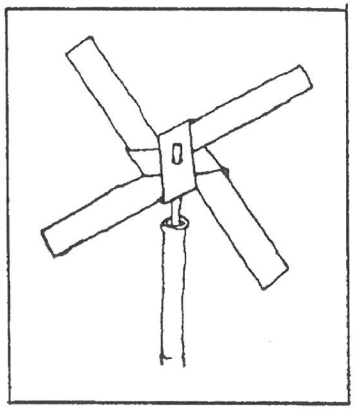
センイをとる植物には、他にもいろいろあるが、与論島では「サンニン」ともいい「ヤマゴータ」ともいう茗芽に似た、いい香のする植物の茎をたたいて、センイをとっていた。これは縄や、編篭の材料にする。この植物は、沖縄では「サンニンガーサ」といっていた。正月の鬼餅を包む。そのために大へんいい匂いが餅に移っていた。

九、玩具

与論島の茶花の海岸で、子供たちが「チバナ」というカヤツリグサに似た草の花で、栗の実のイガを長くしたようなものを摘んで、そのままで、もて遊んでいた。これを砂浜において、風に吹かせて、仲間の

ものと競争させていた。

阿旦葉を割いて、上図のように編んで竹のさきにつけて走る風車もあった。「カダモージャ」（風舞）といっていた。

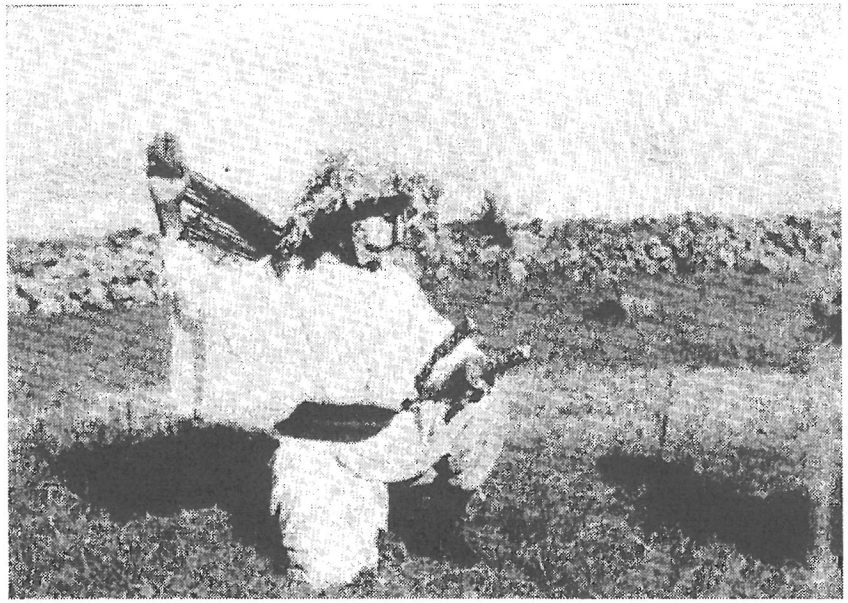


カダモージャ（風舞）

十、劇

この島では他の島では聞かない、古い日本の――といっても、島津時代に入ったと思われる――劇のあることを知った。祭のときの、琉球一般の踊りの間に、島の「一番組」の組子が、能狂言でわれわれのよく知っている「末広がり」、その他、郭巨の筍掘り（二十四孝）、五条橋の牛若弁慶、大江山の鬼退治、三上山のムカデ退治などの倭劇が、言語、音楽、衣裳も琉球化されて、そうと聞かなければ何の事かわからないものがある。それぞれの写真を見ていただきたい。

（この記録は、金関が一九五五年、「九学会連合奄美大島共同調査委員」の一人として、与論島民の人類学的調査をした時の、ノートよりその一部を集めたものである。）



末広がりの冠者

郭巨とその父

解説

中村哲

私は若い頃から金関さんの名を知っていた。小学五年の時、大正十二年の春、清野謙次博士の『日本原人の研究』という新刊書を買ってもらったことは、今も記憶に鮮やかであるが、この方面の学問に興味をもっていた私は、「ドルメン」や「人類学雑誌」に見える金関さんの名を、いつとはなしに知っていた。その後はからずも、台北で辱知の間となり、以来、交友は現在に及んでいる。

私にとっての金関さんは、一種の精神的身内という感じである。しかし学問の経歴においては遙かに先輩であって、先生と呼ぶのが自然な時がある。この呼び方は御本人が好まれないので私もためらうが、学問上さまざまな影響を受けたという点で、敬意を表するなにか適当な言葉はないかとも思う。私はこれまで多くの優れた学者に接することのできる恵まれた環境にあったことを、つねに徳としてきたが、中でも金関さんによる恩恵は大きい。古今東西にわたるアンシクロペディストとして、金関さんは一人の人間が到達し得る限界に近いものを示している感がある。知識に間隙というもののないこういうタイプの学者は、今後は恐らく稀になろう。

江戸時代の博識、太田南畝とか、『翁草』や『塩尻』や『甲子夜話』の著者といっても、金関さんのように、近代科学をその学問の基礎に持っている人ではない。だが金関さんの学問は、解剖学から始まって、人類学・考古学・民俗学へとその領域を拡げたものであり、研究の方法も、西洋の科学的体系をふまえた

上で、東洋の批判的考証を消化したものである。

私はある時、そのような問題意識と関心の広さは、なにに由来するかと尋ねたことがある。それは旧制高校の寮生活によると答えられたが、三高時代に多くの友人からさまざまな刺戟をうけ、知識を競いあったものであろう。そういう雰囲気は、木下杢太郎、芥川龍之介などの一高出身者にも感じられ、私の世代の寺田透や加藤周一などの博識もここに発していると、私はかねてから考えている。

私は金関さんと前後して、昭和十二年、台北の旧帝大に赴任したが、ここは東大と京大の寄り合い世帯であった。そして三高・京大という、京都の文化的ムードも、当然その一部に持ちこまれていた。専門がかけ離れているにも拘らず、金関さんと日夜行動を共にすることが多かったのは、私が戦時下の精神的孤島に悩んでいたからでもあったが、そうしたムードにより惹かれたからであろう。この台北では、大都市では味わうことのできない、文化サロンが形成されていた。私たちのサロンは、内地人の住む城内ではなく、昔からの繁華街、大稲埕を本拠としていた。

当時、私は大学では、天皇の第一章から始まる憲法学の講義をし、また綜合雑誌「改造」に、軍を牽制するための政治強化論を書いていた。この政治評論が時局に捲きこまれるのではないかと忠告したのは、台北では金関さんだけであった。そのことは今も強い印象として残っている。一方、金関さんも、研究室にあった社会科学の書物、特に「改造文庫」を私のもとに托された。私の学問領域であれば、官憲の厳しい眼が見つけても、それほど咎められることはないであろう、という理由からであった。

金関さんは台湾出身者による「台湾文学」の支援者であり、みずから探偵小説などもものして、創作力のあるところを示していた。当時、金関さんほど、台湾人の社会に融けこんでいる人はなかった。金関さんは、台湾の知識人が今も懐しがる数少ない日本人の一人である。

金関さんは街を歩いている時も、全く無駄がなかった。いつも何か新しい発見をしていた。一口で言えば、行間の詰った知識の人であったが、その知識を支えているのは、独特のヒューマニズムであることも、私は次第に理解した。これは主として、生いたちの中に、キリスト教の洗礼があったからであり、学者として立ってからも、その研究の前提は、あまねく人間尊重によって貫かれていた。これはまた、外国人と日本人とを差別しないコスモポリタンの精神である。人種や階級の偏見を免れていた金関さんは、早くから国際的な学者との交流をもっている。別の面から見れば、金関さんは大正デモクラシーが生んだ時代の子であり、かつその具現者である、とすることもできよう。

思えば私が台北で別れてからも、機会を見つけては、金関さんの新しい任地を逐うようにして会ってきた。筑紫・出雲・大和。このようにその土地を挙げてみるだけでも、金関さんは日本人の発祥の原点を求めるような場所に、自分の学問の場を立地していることが分る。その足で海岸の涯や山間の墓地を尋ね、その眼で寒村の民芸や民芸品を捜り、つねに対象そのものの中に自分を置く研究生活を続け、みずからの存在する場所を、最も確実な起点として、経験をかさね精査を積んできたのが金関さんである。そしてその周辺の忘れられ、無視されてきたものを見出し、評価し紹介するのも、その大きな功績の一つであった。美術の鑑識にすぐれ、民芸品などに対しても鋭い審美眼を具えていた金関さんの感覚は、アマチュアの骨董趣味に淫したそれとは、全く異っていた。そのことは、前著『南方文化誌』の、「台湾工芸瞥見記」や「台湾民芸品解説」などを一読すれば明らかであろう。

私はある時、解剖学教室に立ち寄って、思わぬ発見をしたことがある。そこにはいつもの金関さんと全く印象の異った、メスを持った白衣の自然科学者の姿があった。室内一ぱいに並べられた頭蓋骨が、暗い燈下に映し出されていた。そこには精密な解析と測定とがあった。調査と実証による帰納の方法論が、金

関さんの学問の根底にあるという当然のことを、私は改めて思い知らされた。金関さんの豊かな文化論は、この厳密な方法を忘に包んでいることを忘れてはならない。雑学とか雑芸などという、あまり感心はしないが親しみのある概念が、日本にはある。金関さんがその種の大家であることは、前に述べたが、その奥には精緻な科学者の論理が秘められているのである。金関さんは京大医学部の石川博士のことを、屍体に触れたそのメスで自分の歯くそをとっていた、と笑いながら語ったことがある。科学者としての異常なまでの冷静さは、こうした研究室生活において養なわれたのである。そしてこのことを度外視して、金関さんの学問を論じることはできないと、私は痛感している。金関さんは、伊波普猷はもとより、柳田国男や折口信夫のように、主として人間の心情より南島文化を探求しようとした人ではなく、そのような心情をも充分に持ちながら、物に即して科学のメスを振った人である。沖縄の人々がどう考えるか、或いはどう考えてきたかを問うのではなく、調査と研究によって導かれた事実に、時として金関さんは非情なまでに真実を語らせていることがある。

柳田国男は初めて沖縄へ渡る感想を、『海南小記』に次のように書いている。

黒島でも竹島でも硫黄島でも、佐多の岬に立って見ると、顧みて薩州の山を望むよりは猶親しい。島島に行けば次の島が又さうであろう。沖へ出て見たら尚一層、移る心が自然に起ることであろう。

（佐多へ行く路）

柳田は南島への思慕が先に立って、その後に、日本人の起源を探ろうとするのであった。この点では、心より物の尊重を説いた柳宗悦と、金関さんはより通ずる所があると思う。柳宗悦は『物と美』の中で、

人間も活きたものであり、歴史も動きつつあるものに外ならない、……ことは之に対して抽象的な事柄の意になる。多くの観察者を見ると、不思議なくらいことに引かれてゐて、ものの方面を見ない。

少くともものへの洞察者は稀の稀なのである。

金関さんはさまざまな様式の文化に接した時にも、むしろ柳のいうものの感覚に徹して、ことの感情を混じていない。それは自然科学者としての観察を基礎としているからである。柳は、私が金関さんの主宰する「民俗台湾」に係っていた頃、台湾にも渡ってきたが、その時、彼の談話が金関さんの注意深いメモに移され、「台湾の民芸に就いて」と題して、同誌（昭和一八、五・六号）に載せられていることも、附記しておこう。

琉球は金関さんにとって、最も早い頃からの研究フィールドであった。昭和三年から四年にかけての調査は、その成果の一部が「琉球人の人類学的研究」としてまとめられた。本書に収められた「琉球の旅」は、その折の精密な旅行日誌で、前記柳田の『海南小記』から十五年を経た時期に、島を訪れた科学者の記録である。そこには単に人骨採集に関する記述ばかりではなく、南九州から琉球にかけての人々の顔貌に、多くの共通な特徴が認められ、南九州には共通するが、それらは北九州の人々とは全く異なるという感想、或いは琉球の舞踊や芝居に関する精細な見聞を含む点で、半世紀を隔てた現在では、貴重な記録といえよう。

新村出は日本の海洋伝承に、マレー的要素があると指摘したが、当時の研究者は大陸からの北方的要素を強調するあまり、そのことを忘れていた。その欠陥を埋めようとするのが、金関さんの学問の出発点であって、それは別の形の『海上の道』に他ならないと私は思っている。

金関さんと南島との邂逅は、そのように早い時代に遡るが、ここに集められた諸篇は、戦後台湾より帰ってからのものが、その殆どを占めている。金関さんが再び南島と接触を試みたのは、昭和二九年（一九

五四）春、柳田国男の「南島文化の綜合研究」の一環としての、「八重山群島の人類学的調査」を担当した時からである。金関さんの下に、永井昌文（形質人類学）・酒井卯作（民俗学）・国分直一（考古学）の諸氏が参加した。その時の模様を国分直一は、次のように述べている。

三月のはじめであったか、波照間島は濃い緑に包まれていた。隆起珊瑚礁の海辺は、クサトベラの群叢によって、柔らかく覆われていた。パンダナスの多い原野を真紅のデイゴの花が彩り、民家は黒いまでの濃緑の福木に囲まれていた。金関教授は油絵の強烈なタッチを思わせる風景の展開に眼を見はって、ゴッホだ、ゴッホだ、と感歎の声をあげていた。

この島の人々の形質の計測と、下田原貝塚の発掘調査のあいまに、金関さんが朝日新聞に送ったリポートが、「琉球通信」であった。ここに述べられた波照間の島名に関する推論に対し、まもなく宮古島出身の宮良当壮博士の激しい反論が「民族学研究」に掲載された。それに答えた金関さんの大作が、第Ⅱ部に収められている「八重山群島の古代文化」であり、この論考は、先史考古学や民族学を通じて、戦後の南島研究を進める上での出発点となったものである。

八重山地方の先史文化が、一種の農耕文化であるとする見通しは、卓見といってよいであろう。現在この予想に実証が与えられているわけではないが、農耕的石器の組合せが、後代の鉄製農耕具の組合せに対比され得ることが、金関さんの規定を支えていると思われる。住民の体質も先史時代から連続していると見るべきであるとし、八重山の先史文化が、南下したものではなく、逆に北上したものであるとする指摘や、祝部土器の南漸についての挙証などは、当時としては、まさに画期的な発言であった。オーストリアの民族学者、クライナー教授などは、多くのページを割いて、この点について金関説を紹介している（Beiträge zur Japanologie, Bd. 2, Wien 1965）。ただし奄美諸島から琉球諸島に分布しているグレ

イの硬陶の多くは、南漸した祝部土器そのものではなくて、須恵質の硬陶（国分説）あるいは類須恵器（白木原説）などと呼ばれるものであることが、その後次第に分ってきた。しかし、その場合も、金関説の見通しをふまえた上での展開だったのである。

「八重山の民家」（一九五六）は、多忙を極めた波照間の調査の余暇に、採集ノートによって書かれたものであった。これに前後して「野国貝塚発見の開元通宝について」（一九五五）と「呉志の亶州と種子島」（一九五九）が発表された。いずれも南島史研究者にとって、その指針ともなったものである。後者は、後に種子島広田にある弥生時代の埋葬遺跡発掘調査の綜合的成果の上に立ってまとめられ、「種子島広田遺跡の文化」（『発掘から推理する』所収）の一部にとり入れられた。

「『耽羅紀年』に見える琉球関係記事」（一九五六）には、琉球から耽羅、即ち済州島に漂着した事例が紹介されている。その中には、琉球人が彼らより先に同島に漂着していたルソン人を、見分けることができたという記事がある。北から南へ漂流する例が多いのに、逆の場合が乏しいという人がある。先史時代においても、南から北漸する証跡の捉え難い事情と関連して考えようとするものであろう。しかしそういう例ばかりではないことを、金関さんはこの「耽羅紀年」によって教えてくれる。

その他一々触れないが、いま一つ述べておきたいことがある。須藤利一による、バジル・ホール『大琉球島航海記』の翻訳に寄せた、金関さんの文章の中に、次の言葉が見える。

沖縄を知らずに過ごす日本人の一生を、私は不幸な一生だと思う。私がもしいま一度首里の城址を訪ねて、あの美しい守礼の門をくぐることができないとしたら、私の後半生もまた不幸な半生であろう。

この言葉は、いたく沖縄の人々を感激させたということである。

私は台湾を第二の故郷ときめていたため、飛び石伝いに本土へつながる琉球の島々に、南方文化との連

鎖があるであろう、とかねがね注意してきた。しかし媽祖の祭祀や、ペイロンの行事などが、港伝いに点点と本土まで繋がっているだけで、琉球と台湾とは全く別の文化圏であった。だがより広い視点に立てば、共にその根底には環太平洋文化が存在することも、また否定できない。かつて私は古い港町、今は廃れた鹿港に、佐藤春夫の「女誡扇綺譚」のモデルとなった漢詩人の許氏を訪ねたことがある。同家には日月潭の高山族と同じように、八月の月夜には、環を作って踊る古俗を伝えている、ということであった。それは他でもない、漢族文化の地層の下に、環太平洋文化が埋蔵していた証拠である。

金関さんが八重山において、メラネシア系とインドネシア系の文化基盤を指摘しているのは、このことであった。同地の人々のイントネイションの感触によって、まずそのことに気づく金関さんの直感は、このような新しい展望を拓く学者の優れた資質を、遺憾なく示しているものといえよう。八年に及び台湾社会に触れてきた私にも、島人の一部にある発声の語尾には、金関さんと同じようなものを感ずる経験をもっている。

戦前の名著といわれた和辻哲郎の『日本古代文化』の改訂版の序文には、昭和一三年の金関さんの論文「日本人種の構成」（『日本文化史大系』第一巻「原始文化」所収、宮内悦蔵と共著）がまっ先に挙げられ、もし二十年前に自分がこれらの論文を読むことができたのであったら、このようなことは企てたりしないですんだであろう、と書いている。金関さんの研究はこのように、隣接する学問から利用され得る部分が実に多く、いわば非完結的な示唆に富み、現在叫ばれている学問の固定領域の打破に寄与するところが多く、まさに、金関学は学際的である。

金関さんは香川県榎井（えない）の出身である。その村は琴平の参道に当り、日柳燕石（くさなぎえんせき）を生んだ土地柄だけあって、博奕打ちが多かったという。燕石は詩文を善くし、史学に深く、勤王の志篤い侠客で、高杉・木戸・中岡

等をかくまい、そのため三年も投獄されたことがある。しかし明治維新の側に与したため、後に従四位を贈位されている。加島屋長次郎というのがその本名であるが、今日の眼から見れば、この侠客はまさに新左翼の頭目であった。金関さんは戦前戦後を通じて、政治問題には発言していないが、警視庁から警告されるたびにペンネームを変えながら続けた「ドルメン」誌上の『人種秘誌』の翻訳にも見られるように、燕石流の叛骨を貫いており、また体制をはみ出した人柄が、あの厖大な業績や、学問の曠野を横断する研究となった、と私は想像することがある。

私は琉球論に触れつつ、思わず台湾時代のことを多く語ることになったが、これは同氏とともにこの島に日常を共にした時代があったからで、この体験から、とくに見識らぬ読者に伝えたいのは、金関さんにある全人類的な不屈のヒューマニズムの精神のことである。金関さんの主張の底にあるものが、地域ナショナリズムの心情をもつ人々によっても、誤りなく、正確に汲みとられ、それが南島研究への一投石となることを願うものである。そして、この巻に収められた金関さんの論考や報告が一粒の麦となって、今後の南島文化研究の豊かな実りを約束するものであることを私はしみじみと感じ、心ふくらむ思いがする。

あとがき

金関丈夫

足立文太郎先生より、琉球人の体質人類学についての研究を行なうよう、私はかねてから求められていたが、そのために沖縄に渡ったのは、昭和四年のことであった。その時の成果は、「琉球人の人類学的研究」と題して、翌年、私の学位論文となった。こうして私と琉球との接触が始まったが、その後、日本民族はどこから来たのか、という問題ともからんで、琉球の存在はいつも、私の心を強く牽きつけていたのである。

台湾での人類・考古学の調査研究をふまえ、私が再び琉球へ、その南端の波照間へ訪れたのは、戦後の昭和二九年のことであった。九州から台湾へ横たわるこの列島には、種子島をも含めると、前後八度に私の旅は及ぶ。そしてその間、その地に多くの知己をもち、懐しい思い出も限りない。

この『琉球民俗誌』は、愛する琉球についての、Ⅰ雑文・Ⅱ論考・Ⅲ旅行記を集めた。「八重山群島の古代文化」は、私の新聞紙上の発言に対する、宮良当壮博士の反論に答えたもので、論争の範囲をはみ出し、私の琉球に対する研究の、一応の綜合見解ともいうべきものを示している。宮良博士の意見は、つづく服部四郎博士のそれと共に、「わが沖縄」叢書第三巻『起源論争』(谷川健一編、昭四六、木耳社)に、すべて収録されている。また「琉球の旅」は、私の日記とメモをもとにして、京大の「歴史と地理」に連載したものである。すでに五十星霜を隔てる今、このような見聞記にも、多少の価値はあるかも知れない。ただ原文は、例えば「宝来館に投宿すべく桟橋を出ればいっ、早くも腕車は来って予を拉し去った」というよ

うな、古い文体であるので、やや現代風に改めた。

なおこれ以外に、「種子島広田遺跡の文化」（『発掘から推理する』朝日選書40）や、「十字紋の恨み石」「青白間道の行纏」（『木馬と石牛』角川選書81）等は、本来ここに収められるべきものであった。それらもお読み下されば幸いである。

この巻の解説は、法政大学総長であり、かつその沖縄文化研究所長でもある中村哲博士に依頼して、快諾を得た。博士は私の台湾時代からの旧知であり、「民俗台湾」を共に編集した仲間である。この書物が法政大学出版局から刊行されることと併せて、私の喜びこれに過ぎるものはない。

初出発表覚え書

I

南島の古代――「毎日新聞」（西部版）一九五四・六・八

琉球通信――「朝日新聞」（西部版）一九五四・三・三～一七

八重山の民家――「民俗建築」一七・一八合併号、一九五六・九

ガーサと月桃――「琉球新報」一九六〇・一二・一九

野国貝塚発見の開元通宝について――「琉球新報」一九五九・三・二九～三〇

与論島をめぐって――「西日本新聞」一九五五・八・二三

沖縄波照間島発掘石器――「西日本新聞」一九五四・四・九

私と琉球と本――「日本古書通信」二〇巻三号、一九五五・三

バジル・ホール『大琉球島航海探険記』――『胡人の匂い』所収、一九四〇

呉志の亶洲と種子島――「毎日新聞」一九五九・七・二九

『耽羅紀年』に見える琉球関係記事――「琉球新報」一九五六・一〇・一七―一八

沖縄の旧友――「琉球新報」一九五四・五・二

南風原朝保博士を懐う――「琉球新報」一九五七・三・三
カーの思い出――「沖縄タイムス」一九五六・九・一五～一六

Ⅱ

八重山群島の古代文化――「民族学研究」一九―二、一九五五
琉球の言語と民族の起源――「琉球新報」一九五六・一・六、一八
八重山本『大和歌集』――「芸林」一―三、四、五、一九五四

Ⅲ

琉球の旅――「歴史と地理」二四巻六号～二九巻四号、一九二九～一九三三
与論の旅――「えとのす」九号、一九七八・二

著者略歴

金関丈夫（かなせき　たけお）

明治30年（1897）香川県琴平に生まれる．松江中学・三高を経て，大正12年京都大学医学部解剖学科を卒業．京都大学・台北大学・九州大学を経て，現在は帝塚山大学教授．考古学・人類学・民族学を専攻．
著書に『日本民族の起源』『南方文化誌』『文芸博物誌』『人類起源論』『胡人の匂い』『木馬と石牛』『発掘から推理する』など．

琉球民俗誌

1978年6月10日　初版第1刷発行

著　者　©金　関　丈　夫
発行所　財団法人　法政大学出版局
東京都港区南麻布2-8-4
振替　東京6-95814　電話(03)453-0717
印刷／三和印刷　製本／鈴木製本所

1038-50070-7710